
マニアセレクト

真名あきら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マニアセレクト

【Nコード】

N3685M

【作者名】

真名あきら

【あらすじ】

SS短編を集めたものです。

基本的には読みきり。ジャンルは様々。年齢もシヨタから、オヤジまでセレクトしています。

長編の番外や、お題小説など、これでもかというほどに詰め込んでいます。

一度読んで見たら、貴方のお好きなものが見つかるかもしれません。

シヨタ「大好きな・・・」

駅を降りると、すごく熱かった。

でも、駅を出たらお父さんが待っている。

そう思ったら、楽しくなつて、僕は一生懸命、出口に向かって走る。公共の場所では走ってはいけません。なんて先生は言うけど、今はそんなの無視！

一ヶ月ぶりに会う。大好きなお父さんが待ってるんだもん。

「都！」

僕の顔を見ると、お父さんはすごく嬉しそうに笑った。

「お父さん！」

大きく広げたお父さんの腕に飛び込むと、お父さんはそのまま僕を抱え上げてくれた。

「大きくなったなあ。小学校はどうだ？」

「うん。一年生で一番高いよ。この間、かけっこで一等賞だったんだ！」

「そうか！」

僕は春に一年生になった。

本当は、学校なんて嫌な奴もいっぱいいるんだけど、そんなことお父さんには言わない。お父さん、心配しちゃうもん。

「今日は都の好きなハンバーグにするからな」

「ホント？ 甘いにんじんもある？」

「もちろん」

「やったー！」

お母さんと違って、お父さんはずっともお料理上手だ。にんじんだって、ぴーまんだってすごく美味しい。だから、僕は同じクラスの子達みたいにお野菜嫌いなんて、子供みたいなことと言わない。何でも食べるから、大きいんだって。

「明日は遊園地行こうな。都は何に乗る？」

「ジェットコースター！ あと、コーヒーカップがいい！」

「ぐるぐる廻る奴ばかりだな」

お父さんは、人がたくさんいるところだと、必ず手をつないでくれる。今日も手をつないだまま、お父さんのうちへ帰った。

「ただいま！」

大きな声で言う。お母さんはお邪魔しますって言っただよ。って言うけど、何でだろう？

ここはお父さんと僕のうちなんだもん。やっぱりただいまだよ。

「おかえり」

ほら、お父さんだって笑ってる。

「お父さん、ジュース飲んでもいい？ お父さんも飲む？」

「そうだな。お父さん、コーヒーがいいな」

冷蔵庫を開けると、缶コーヒーと、僕の大好きなオレンジジュースが入ってる。僕は戸棚から、コップを出して、それにジュースを注いだ。

僕のお茶碗も、お箸も、コップもそのままなのに、どうして、お父さんと一緒にいられないんだろう。

同じクラスの朋くんにどうしてお父さんと一緒に暮らせないの？ って聞いたら、「都ちゃんのお父さんとお母さんはリコンしたんだよ」って言ってた。

リコンって何？ って聞いたら、お母さんとお父さんが喧嘩して一緒にいられなくなるんだって。

朋くんはいつもとっても物知りだけど、それは違うと思うな。だって、お父さんとお母さんは喧嘩なんかしてないよ。

僕は小さい頃からずっとお父さんといたんだもん。そこに、知らない女の人に来て、「お母さん」だって言われたんだ。

これから、お母さんと暮らすから、お父さんと離れなきゃいけないんだって。

そんなの嫌だって、押入れに隠れて泣いてたら、一ヶ月に一回だけ

お父さんに会いに来てもいいって言われたんだ。

それでも嫌だつて言ったら、お父さんがすごく悲しそうな顔になった。お父さんが悲しいのは、僕はもっと嫌だから、お母さんと暮らすことにしたんだ。

僕がお父さんと離れる日に、お父さんは僕がずっと行きたがってた遊園地に連れて行ってくれた。

帰りにお父さんがおんぶしてくれて、眠くなつて、そしたら、お父さんとお母さんが話してた。

「すっかり懐いちゃつて。ごめんね、聡」

「いや、俺も早く知らせれば良かったんだ。昌俊が死んでから、あんまり懐いてくれたんで、離せなかった」

「でも、もうアタシが育てるわ。アタシの子だもん。聡も、何時までも、死んだ恋人に縛られていることは無いのよ。昌俊のことは早く忘れて」

「うん。そうするよ。でも、しばらくは都のお父さん代わりでいたいな。ずうずうしいな、俺」

「ううん。この子が分別付くまではそうしてあげて」

眠かったし、判んない言葉がいつぱいあったけど、お父さんが悲しそうなだけは解かった。

いつか、大きくなったら、僕がお父さんのそばにいてあげる。そして、さびしくないよ。

□ □ □

「お父さん、学校で、将来何になりたいかって聞かれたんだ」

「へえ、都は何になりたいんだ？」

「お嫁さん！」

「おいおい、都は男の子だろう？」

「やっぱり、おかしい？」

そうなんだ。みんな笑うんだ。朋くんだけは、誰のお嫁さんになり

たいかって聞いてくれた。

「お父さん」って言ったら、「お父さんと一緒にいたいんだよね」
って。

でも、お父さんは困った顔をしている。

「男の子は、お嫁さんを貰うんだ。お嫁さんにはなれないんだよ」
「そうなんだ！」

そうか、それでみんな笑ってたんだ。じゃあね。

「お父さんをお願いしたい！」

「え？」

「お父さんが、僕のお嫁さんになって！」

「ええ……？」

約束約束。ゆびきりだ！

「ゆびきりげんまん、うそついたらはりせんぼんのーます」

お父さんは困った顔をしてるけど、約束しなきゃ。

でなきゃ、お父さん、誰かにとられちゃう！

「約束ね！」

僕は立ち上がって、驚いてるお父さんの唇に、チューをした。

朋くんは、お嫁さんの約束は唇にチューするんだって言ってたもん。

「絶対に約束だよ！」

お料理上手で、綺麗で優しい、僕のお嫁さん。

<おわり>

シヨタ「大好きな・・・」(後書き)

シヨタはシヨタでも、シヨタ攻めでした。

お父さんと育った都ちゃんがどうなるかは、またのお話。
次回は、学生モノです。

学園もの【おだやかな恋人たち】

図書委員なんて地味な癖に、面倒な仕事が満載だ——多くの生徒はそう思っていたし、生徒会の中でも軽んじられがちである。

だから、クラスの中でも比較的大人しくて友人の少ない小池^{こいけ}芳に、それが割り当てられたのは必然と云って良かった。

芳は、それでも不平を云わずに業務をこなしていたし、放課後や昼休みの当番も進んでやっている。

芳の数少ない友人の一人、倉林などは、『そんなに真面目にやらなくても適当でいいんだ』などと云うのだが、芳は何事にも手は抜きたくなかったし、実は芳にだってそれなりの下心が存在していた。

「誰かがやらなきゃいけないなら、僕がやってもいいだろ？」

なので、倉林への反論も勢い声が小さくなってしまう。

「芳はホントに人が良すぎだよ」

芳の心など知らない倉林は、しきりに憤慨していた。大体、図書当番だって、全委員が担当するべきもので、通常なら7クラスで3学年なので、一月に一度、多くても2度しか廻って来ないものなのだから、3年の塾通いや、2年の部活などの交代要員を、殆ど芳が引き受けているのである。そうすると一年までサボりたい時は芳に当番を頼むのが通例になってしまつて、芳はすっかり図書館書館の主と化していた。

大体において、男子校の図書室など、試験前でも無ければ誰もいないのが当たり前で、芳は本の修理や整理の傍ら、カウンターで本を読むくらいしかすることが無い。

誰もいない放課後の図書室は、ひんやりとした空気のある穏やかな場所だった。

いや、芳の他にただ一人だけ、そこに存在する人間がいる。

図書館の片隅にある長細い窓から射し込む、昼下がりの穏やかな光の中で、眠っているのは、高校の一年生と云うにはかなりふてぶてしい容貌の男だ。

多くのクラスメイトが、軀だけは大きいものの、まだまだあどけない少年の面差しを残す風貌であるのに対して、彼だけは既に大人の様相をまといっている。

まだ、軀さえ大人になりきれていない芳にとって、彼、小沢健次おざわけんじは初めて見た瞬間から憧れだった。

カウンターで本を読みながら、時折顔を上げて、彼の寝ている姿を盗み見る。

こういうとき、芳は顔の半分を覆い隠すような度の強い眼鏡に感謝するのだ。小沢はきつと自分の視線になど気付かないだろうと安心できたから。

いつから小沢が放課後の図書室の陽だまりで眠るようになったのか、芳は覚えていない。

気付いた時には、放課後の図書室で眠る小沢と、その寝顔をそっと見つめる自分がいて、まるで二人だけの時間がソコに存在するかのようだ。

最初は憧れて見つめるだけの小沢に、芳が恋心を抱くようになるのには、さほど時間が掛からなかった。

「まだ、残っていたの？ 閉めるわよ？」

年若い司書の声に、芳ははっと顔を上げる。

いつもは、時間になると小沢が出て行くので、ソレをきりに引き上

げていたのだ。

だが、小沢はまだ眠ったままだ。

「すみません。あの、でも……」

司書は、芳の視線の先の小沢に気付いたらしい。

ヒールの音も高らかに近寄って行くと、小沢の耳を摘み上げた。

「いでで……、この暴力女！ 何しやがんだ！」

一発で目が覚めたらしい小沢が、司書の手を払う。

「目が覚めたでしょ？ アンタの所為で小池くん帰れなかったのよ」
司書の広田は、腰に手を当て偉そうに小沢を見下ろした。

「あ、悪いな。小池」

いきなりまっすぐな視線で見られた芳は、天にも昇る心地だ。しかも。

「小沢くん、僕の名前……」

確かに、『小池』と小沢は呼んだ。目立たない芳は、時折クラスメイトすら名前を間違えることがあるくらいなのだ。

「俺だって同じクラスの奴の名前くらい覚えてる」

そうは云われても、遅刻常習犯で授業だって結構サボっている小沢が、クラスでも目立たない自分を知っているなんて、誰が思うだろうか？

「鍵、閉めるわよ」

「あ、はい」

司書の声に、慌ててカバンに読んでいた文庫本を放り込む。
外へ出ると、図書室のドアのところに小沢が立っていた。

「一緒に帰ろうぜ」

「う、うん」

どんな気まぐれで、小沢がそんなことを云い出したのかは解らないが、振って沸いた幸運が、素直に嬉しくて、芳は思わず頷いてしま

「小池さ、いつも一緒にいるだろ？ 倉林」

二人して並んで歩いていると、ふと思い出したように小沢が口を開いた。

「仲いいのか？」

「うん、そうだけど」

成り行きで一緒に帰ることになったものの、きっと小沢は、芳と何を話していいのか判らないのだろう。いきなり飛んだ話に芳は首をかしげる。

それとも、それが聞きたくて、一緒に帰ろうなどと、言い出したのか。

「あのさ、え、と。間違ってたらごめんな。付き合ってたのか？」

ツキアツテンノカ？——云われた言葉が芳の中で形になるのには時間が掛かった。あまりに意外な言葉だったからだ。

「な、ななな、何でそういうことになるわけ？？？」

芳がどもってしまったのも無理は無い。確かに芳は小沢が好きだが、その他の男など考えたことすら無かった。

「いや、ごめん。でもあいつ、いつも俺が小池に話し掛けようとする」と邪魔するから

「え？」

小沢が自分に話し掛けようとしていた？——初めて聞く事実、芳の頭はショートしそうだ。

「何で？」

「俺、いつも図書室で寝てるだろ。でも、最初は屋上とか中庭とか、いろんなところで寝てたんだぜ。でも、図書室が一番落ち着くんだ」そう云えば、と芳は思う。図書室なんて決して快適な場所ではない。夏は暑いし、そろそろ肌寒い。屋上や温室の方が余程暖かいし、風の通る中庭は、夏には快適な場所だ。昼休みならともかく、人のいない放課後ならそっちの方が過ごしやすい筈。

「そのうち、図書室でも落ち着かない日があるって気付いたんだ。他のヤツが当番の日は何だか、こう落ち着かなくてさ」

「そうなんだ」

それでは芳だけでは無く、小沢もあの時間を大切に思ってくれたの
だろうか？ 芳は胸の奥がほわんと暖かくなるのを感じていた。

「何で小池だとこんなに落ち着くんだろうって思ってた、話してみ
たかったんだ。お前と」

小沢はまっすぐに芳を見つめてくる。

「お、小沢くん？」

その視線に、芳は戸惑いと、強い胸騒ぎを感じた。

「時々、俺のこと見てたよな？ 俺の自惚れじゃないよな？」

「気付いて……」

小沢がうなずくのに、芳は顔に火が付くような思いを感じる。

だが、逃げ出すより早く、小沢の手が芳の細い腕を掴んで離さない。

「離してッ、お願い」

恥ずかしい、逃げ出したい。それしか考えられない芳は、小沢の腕
を振りほどこうと必死だ。

「逃げないでくれよ。俺、自惚れてるだけか？」

そんな芳を、小沢がそっと抱きしめる。ありったけの思いを込めて。

「お、ざわ、くん……？」

「なあ、応えてくれよ」

芳の憧れていた小沢は、いつも自信たっぷりで、クラスの誰よりも
大人だった。その小沢の声が、今はひどく自信無さ気だ。

しかも、自分を抱きしめている小沢の腕は震えている。

「小沢くん。それ、僕のことが好きってこと？」

「駄目か？」

芳の言葉に、小沢が泣きそうな顔をした。

「駄目なんかじゃ無いよッ！」

芳は嬉しさのあまり、小沢に抱きつく。

「こ、小池？」

いきなりの芳の行動に、今度は小沢がパニックになった。

「僕も、好き。小沢くんのが好き」

芳は熱に浮かされたように、告白する。叶うとは思っていなかった
想い。

「嘘じゃないよな？」

「小沢くんこそ嘘じゃないよね？」

互いの顔を見合わせて、芳と小沢は笑いあった。

どちらからともなく、手を繋ぎあう。

帰り道は、あの図書室以上におだやかな空間だった。

<了>

擬人化「カフェブレイク」

しくしくと泣く声が聞こえて、シュガーはとことこと近寄った。

そこでは案の丈、ミルクがすすり泣いている。

「ミルク、どうしたんだよ？」

「シュガーあ……」

べそべそと泣きじゃくる、ミルクの云いたい事は、長い付き合いのシュガーには、もう耳にタコが出来るほど聞いている愚痴に違いな

い。

「珈琲に嫌われちゃった……」
は~~~~と深いため息を付きたいのを堪えて、シュガーがぼんぼんと頭を叩く。

真っ白なミルクは、心まで真っ白だ。

小さな頃から真っ白で可愛かったミルクを、シュガーは、すごく大切に、甘くしてあげた。

但し、今のミルクはすっかり大きくなっていて、小さなシュガーよりもずっと大きいのだが、小さな頃の関係はそのまんまだ。

「嫌われちゃったって、何をしたんだ？」

珈琲は独特の肌の色と、芳醇な香りで人をひきつける魅力の主で、真っ白なミルクの小さな頃からの憧れの人だ。

「チューしたいって云ったら、いいよって云ってくれたの。それでチューしたら、そんなのチューじゃ無いって怒っちゃって……」

いよいよもって深くなりそうなため息を抑えて、シュガーは優しくミルクの頭を撫でる。

これは、ひと言珈琲に云うべきか、否か。

遊び人の珈琲とは、ミルクは違うのだ。本気じゃなければ、遊ぶのはやめて欲しい。ミルクが傷つくだけだ。

「ああ？　とろくさい事云うなよ。あーんなお子ちゃま、俺とキス出来ただけでも、喜んで欲しいもんだね」

べそべそと泣くミルクを泣き止ませて、シュガーは珈琲のところへとやってきた。

「大体、俺は大人がいいんだよ。モルトウイスキーとか、ビターみたいな割り切って付き合える相手としかやりたくないの」

「だったら、キスしてもいいなんて云うなよ。子供をもてあそぶのが、君のやり方か？」

わがままな王様・珈琲には、シュガーの怒りなど届かないことは判つてはいるが、それでも必死で訴える。

「はあ？　あいつが、したいって云ったんだぜ？　俺が、無理やりした訳でもないだろう？」

「そういうことを云う訳だ」

あんまりな言い草に、シュガーはカチンとなった。これ以上は、いくら話しても無駄だ。所詮、珈琲と自分たちでは考え方が違うらしい。

くるりときびすを返す、シュガーに、珈琲は艶然と微笑みかけた。

「たまには、甘いのもいいかもな。ミルクみたいなお子ちゃまはゴメンだが、お前ならいいぜ？」

その微笑みは、魅力的で、珈琲のことを快く思っていないシュガーでさえ、思わずクラリときそうだ。

これでは、身体だけは大きくなった、お子ちゃまミルクなど一発だろう。

ちよつと思ひ知らせてやりたい気になる。

だが、それはシュガーでは駄目だ。

ミルクが一矢報いてこそ、意味がある。

シュガーは台所の片隅で、人の悪い笑みを閃かせた。

「ねえ、ミルク。ミルクは珈琲とだけしかキスしたくない？」

真つ白なミルクの膝に甘えかかって、シュガーが問う。

「な、なな、何？ 何で？」

シュガーの浮かべた、甘くとろけるような微笑に、ミルクはどきまぎとしてしまって、ひたすら焦るばかりだ。

「僕とは、キスしたくない？」

身を起した、シュガーが妖しく誘う。

「ミルク。僕はミルクとキスしたいな」

目を合わせて、唇を薄く開いたシュガーは、ちよつとだけ拗ねたように唇を尖らせた。

「ね？ ミルク？ 僕とキスしよう。練習しようよ、大人になる練習」

甘いシュガーに誘われないものなどいない。

ミルクはふらふらとシュガーの唇に唇をぶつけた。

「ミルク」

これでは、珈琲に怒られる筈だ。バツが悪そうに、シュガーを見るミルクを、シュガーは包み込むように微笑む。

そして、ゆつくりと、今度は自分から唇を寄せた。

触れるだけのバードキス。

何度も角度を変えるうちに、唇はどんどん深く触れ合っていく。

少し、唇を開いて、舌を忍び込ませ、ミルクの舌を誘った。

「シュガー……」

「そう、ミルク。いい感じだよ」

ばわんと、自分の名前を呼ぶミルクに、シュガーは、また唇を薄く開いてみせる。

誘われるままに、今度はミルクがシュガーにキスしてきた。

触れるだけで離れようとするそれを、シュガーは、自ら誘い込む。

「シュガー。何だか熱いよ」

「そう、そのまま、熱くなっていんだよ」

ミルクが深く唇を合わせて、シュガーの舌を吸い上げた。

珈琲にあげるの、もったいないな。

このまま、僕が飲んじやおうかな？

拙いけれど、情熱的なそれに、シュガーが負けそうになった頃、ミルクが突然身体を離れた。

「どうしたの？」

シュガーが覗き込むと、そこには今にも泣きだしそうなミルクの顔がある。

「駄目だよ。やっぱり、僕、珈琲じゃなきゃ駄目」

真っ白なミルクの流す涙は、ぼろぼろとこぼれて、真珠のようだ。それを指先ですくって、シュガーは甘くふわりと微笑んだ。

「行きなよ。珈琲のところ」

真っ白なままぶつかるのが、やっぱり、ミルクらしい。

「うん。ごめんね、シュガー。ありがとう」

「いいよ」

小さいミルクを甘くするのが大好きだったシュガーは、ここでもミルクを甘やかす。

優しく、甘く。駆けていくミルクを見守った。

「おい、シュガー」

声を掛けてきたのは、王様・珈琲だ。

「何？」

夕飯前の忙しいシュガーは、とげとげしい気分で振り向いた。

「お前、アイツに妙なこと、教えただろう！」

「アイツって？」

「決まってるだろう、あの…」

口を開きかけた、珈琲の後ろから、てててと、駆けてくる足音が響く。

「珈琲！」

シュガーの前だというのに、ミルクはガバリと珈琲に抱きつく。

「おい、お前ツ、止めろって」

ごろごろと珈琲に懷く、ミルクに、シュガーはあんぐりと口をあけてしまう。

「だーめ、僕だけでしょ？ 珈琲」

「馬鹿云うな！ 誰がお前みたいなお子ちゃまなんか…」

そういつて抵抗している珈琲の頬が染まっているのを見て、シュガーはほくそ笑んだ。

「そっか。ミルクのモノなんだ。珈琲ってば」

「馬鹿野郎ツ、誰がだ！ お前もいい加減に離せ！」

「痛い、珈琲」

殴られながらも楽しそうなミルクに、シュガーはこっそりと親指を立ててみせる。

それに、ミルクが嬉しそうに微笑を返した。

「さー、僕は忙しいの！ ラブラブ馬鹿ツプルは、退いた退いた！」

「誰が、馬鹿ツプルだ！」

ミルクに引きずられながらの、珈琲の罵倒はやがて遠くなっていく。真っ白なミルクの真っ白な笑顔が見ただけで、シュガーはあったかい気分になった。

「でも、ミルクも男の子だったんだねえ」

ごくりと飲んじゃう気でいたけど、あのままだったら、シュガーの方があぶなかったかもしれない。

シュガーの眩きは、夕方の台所の喧騒に溶けた。

<おわり>

社会人「サイズ違い」

「おい、ツトム。ピーツに池上のA1の図面送って置いてくれ」
設計チーフの津山さんに云われたとき、俺は青焼きの図面をコピー中だった。古いコピー機は中々に音が大きくて、言葉が聞き取りづらい。

「池上の図面にB2の奴なんかありましたっけ？ それをA1に拡大すればいいんですか？」

池上フローレンスというありがちな名の単身者向けのワンルームマンションは、津山さんの担当だ。

「何云ってんだ、あそこはピーツに発注してただろう？」

津山さんのハンサムな顔が、怪訝そうに俺を見る。

そうだったっけ？ 今時B2で図面作るなんて珍しいな。大体が、パソコンで図面を書くのが主流の昨今。理数系に強い工業系の職場では、図面はほとんどデータでのやり取りで、出力はA3が普通なんだ。

青焼きと呼ばれる昔ながらの青い図面は、現場で使う為に、A1なんだが。

俺が首を捻っていると、横にいた加奈さんが、ぷーっと吹き出した。

「あのさ、違うつてツトム。津山ちゃんは、外注の株式会社ピーツに、A1の青焼き送ってつて云ってんのよ」

「へ？」

俺は勘違いに真っ赤になる。

「がんばれ、新人！」

加奈さんはげらげら笑いながら、取りに来たアンカーを手に、自分の箱車を転がして出て行った。

何たる恥。外注さんに、間違いを指摘されるなんて。しかも、完全な勘違い。これじゃ、丸きり馬鹿だ。

見ると、津山さんも肩を震わせて笑っている。

「ま、良くやる間違いだ」

嘘付け！ 笑いながら云われても説得力無いぞ！

「そう、頬膨らますな。久しぶりにメシ食いに行くか？」

ちくしょう！ 誤魔化しやがったな。と思いつつ、設計チーフで残業代をたっぷり貰っているらしい津山さんのおごりで食う飯は、高卒組の俺らが行くような、安い定食屋じゃない。ファミレスでもちよつとお高めの店だ。

「肉ならいいつす」

俺がむつとしたまま答えるのを、津山さんはニコニコ笑って、頭を撫でる。子供じゃない、と反発するのは簡単だが、子ども扱いしかされないような仕事しか出来ないのが悔しい。

俺は、睨むように津山さんを見ながら、頭を撫でる手には逆らえなかった。

「ツトム。行くぞ」

適当なところで残業を切り上げた津山さんが、倉庫のシャッターを下ろす。

その後ろを付いて行こうと、走り出した俺の襟を後ろから掴まれて、思わず首が絞まる。

げぼげぼ云いながら、振り返ると、後ろには耕一さんが立っていた。

「やつと終わりか？」

「うん。今から会社の人とメシ」

やっぱり、耕一さんカッコいいや。年相応の若々しさとは無縁だけど、渋いいかにもオトナのオトコって感じ。

「メシ？ 二人きりで、か？」

耕一さんの冷たい声は、久しぶりの逢瀬に浮かれていた俺を正気に戻した。

俺、また何かやっちゃったかなあ？？？

「どうも。ツトムがお世話になっております」

「ツトム、こちらは？」

お互いに相手を探りあうような視線を交わす、二人の大人たちの間で、俺はちよつとびくびくしていた。何となく、火花が散ってるような気がすんのは、俺の気の所為か？

「佐藤さん、俺が高校の頃からお世話になってる人です。あの、それで津山さん、悪いっすけど」

忙しい耕一さんは滅多に会えない。せつかく来てくれたんだ。津山さんには悪いが、耕一さんとデートしたいよ。

「悪いが、ツトムは俺が先約だ」

口ごもる俺の肩を抱きこんだ耕一さんが、津山さんを睨みつける。

あの、嬉しいけど、耕一さん。コレじゃ俺たちの関係、もろバレじゃん。

「行くぞ。功」

津山さんが口を挟む暇も無く、耕一さんは俺を抱き寄せて歩き出す。

「功。アイツ、ゲイだぞ。そんな相手と絶対にメシなんか食いに行くなよ」

「え？」

うつそ？ あのオナナにモテモテのハンサムな津山さんが???

「同類だからな。いいか、絶対に許さんぞ」

「は~~~~い」

せつかくの美味しい夕飯にありつけないのはもったいないが、それよりも耕一さんを宥める苦労を思うと、諦めも付く。

「こんな時間でもいいんなら、俺がメシ食わせてやる」

「え？ ホント？」

飯も魅力的だけど、平日に耕一さんとデート出来るの???

「今までは俺が遅いと思ってたが、お前もこんな時間になるんなら、別に構わないだろう」

「うん！」

俺は勢い良くうなづいた。

社会人ってちよつと美味しいかも。

<
お
わ
り
>

日常系【視線】

シャワーから出ると、軽く頭を拭いた。

タオルを首に掛けたまま、冷蔵庫を開ける。風呂上りのほてった身体に、冷えたビールは、冬でも止められない習慣だ。

「ぷは…っ」

半分ほどを一気に飲み干したとき、ふと、強い視線が絡みつくのを感じる。

半端に開いた襖の奥に存在する、ダブルベッドに身をおこした男は、まるで俺の一挙手一投足さえ見逃すまいとするように、じっと視線を投げかけていた。

さすがに居心地の悪さを感じて、缶ビールを片手にベッドへと戻ると、残りを差し出した。

ニヤリと笑って、残ったビールを飲み干したのは、一応、俺の恋人に当たる男だ。

「お前さ、俺なんか見てて、楽しいか？」

「もちろん」

用意されたように帰ってくる答えが、俺をますます居心地悪くさせる。俺は、そのままベッドへと潜り込んだ。

「お前、俺のこと信用してないな？」

ベッドへ潜り込んだ俺の耳に、よく響く低音が囁きかけてくる。

「お前なら、自分の顔でも見てた方がいいんじゃないのか？」

まさしく、白皙の美貌と云うに相応しい容貌のコイツが、何を思っ
て俺なんかと付き合っているのか。正直、未だに謎だ。

「俺は、自分の顔は好きじゃない。俺の好みは、お前みたいな男なんだよ」

後ろから俺を抱きしめる手に力が籠もる。

「筋肉の付いた綺麗な背中もいいし、それをずっと伸ばして歩く姿もいい」

「そんなに筋肉が好きなら、ボディビルダーとでも付き合えよ」

拒絶より、拗ねた色の強い俺の言い草に、宥めるように、キスが落ちてきた。

「ばーか。見せるための筋肉は、いらないの。ちゃんと機能的なのが好きなんだよ。お前が、きちんと練習してきた証だろ」

そういうのがツボなのか。解からない好みだ。

「それに、締めもいいしな」

綺麗な顔に似合わない、品性下劣極まりない台詞を聞いた瞬間に、俺の蹴りが、中年に差し掛かってしまったく出る気配の無い腹に、見事に決まった。

「お前、今日、布団決定。絶対に、ベッドに上がって来るなよ」

そのまま、ベッドの下に蹴りだされた男に背中を向けて、俺はベッドへと潜り込んだ。

「え？ ごめん、すみません。軽いジョークだろ、なあって」

恋人は、背中に張り付いたまま、謝り倒している。

さて、どのタイミングで許してやろうか。

<おわり>

ファンタジー【契約】

それに声を掛けたのは、まったくの気まぐれだ。

蒼流は、面倒くさそうに寝そべった身体を起こした。

己が居城のあるこの深い黒の森の奥に、入り込むものはそう多くは無い。

何も知らぬ獣たちでさえ、ここの濃い魔気を感じて近づかないのだ。その代わりに、この美しい澄んだ泉は、自分だけが楽しむ景色である。

じつと目の前の泉を見つめるのは、まだ少年と云って差し支えない男だ。

ただ、少年と呼ぶには、いささか瞳には大人びた色が濃い。

苦悩と、諦めと、決断を秘めた瞳。その全てを小さな肩に背負っているのだろことは、身なりからも明らかだ。

ただ、それにしては付いてきて当然の筈のお付きの姿が無いのが気になるが。

少年が、腰に下げた剣を抜き放ち、思い切り息を吸い込んだ。

「藍鏡の泉に住まう主に話がある！」

「何だ？」

声を張り上げた背後から声を掛けると、少年が目を丸くして振り返る。

その瞳に、驚きはあっても怯えの色が無い事に、むしろ蒼流は舌を巻いた。

「貴方が？ 藍鏡の泉の主……」

「俺がここに住んでいるのかと云われれば、そうだな」

水の色彩の透き通る長い髪と瞳は、蒼流が人では無いことを示している。

「貴方がこの主ですか？」

「人が勝手にどう呼ぼうが、俺は知らん」

確かに、ここには蒼流自身がもう覚えてもいない頃から、己の居城だったし、そこで多くの魔物たちを従えてもいる。

だが、魔物は勝手に蒼流の力に惹かれて集まってきただけで、蒼流の臣下でもなんでもないのだ。追いつくのも面倒だから、傍に置いておくに過ぎない。

「で、俺に話とは何だ？」

「私に力を貸してください！」

臆することなく、真っ直ぐに蒼流の瞳を見据えて云う少年に好感は持ったが、それだけのことだ。

「ほう、俺の力を借りると云うのか？ 代償は何だ？」

ただで力を貸せと云う無鉄砲は気に入ったが、だからと云ってそれを承知するほど人は良くない。

「私が国王になったら受け継ぐもので、差し上げられる範囲のものならば」

どうやら、少年はこの国の皇子らしい。

「差し上げられる範囲とは、またケチくさいな」

「私は国を迫り来る脅威から護りたいだけです。それに見合った報酬だと思います」

揶揄めいた蒼流の言葉に、少年は乗る事は無かった。

あくまで、この魔物相手に対等な商談を持ち込もうと云う辺り、いい根性だ。

「貴方が新たな脅威になつては元も子ありませんから」

「嫌なガキだな。肩肘の入りように年季が入っている」

「幼い頃から、そう育てられて来ました」

こちらの嫌味に答えながらも、少年はひたすら蒼流の返答を待っている。

「まあ、いいだろう。俺の魔力を貸してやる」

少年の瞳が見開かれた。但し、喜色に、ではない。ひたすら、驚愕

というのが正しいだろう。

「どうした？ 嬉しくないのか？ このままではお前の国は隣の国に呑み込まれてしまうぞ」

「いえ、承知してくださいとは思っていなかったのです」

少年は戸惑いで視線をさまよわせる。

「貸してやるだけだ。いずれ、返してもらうさ。そうだな、三百年でどうだ？」

人の一生は短い。精々、長持ちして七十年がいいところだ。それだけあれば、体制が変わるには充分だろう。

「貸して下さる範囲は？」

「とりあえず、東からやかましく迫ってくる軍は蹴散らしてやる。

それから、簡単な護りを張ってやるう。それと、この森には金輪際近づくな。近づいた奴は、魔物の餌食だ」

いま、この国に迫ってくる大国の軍を追い返し、国を広げる野心さえ持たねば、守護の中に国を置くことが出来る。反対側の国境に横たわる森には、魔物どもの住処があるのだ。

「好条件ですが、貴方の報酬は？」

それだけの条件を並べた蒼流を、少年の瞳が不安そうに見上げた。

「そうだな。俺を人間の魔術師として雇ってもらおうか」

「は？」

今度こそ、冷静な少年が目を剥いた。してやったりと、密かに蒼流がほくそ笑む。こういう表情が人は楽しいのだ。

「人の暮らして奴に興味がある。魔術師ならば、人より長生きしても怪しまれんだろう？」

「ですが、その姿では…」

戸惑いを隠しきれない少年の目の前で、蒼流の長い髪は銀に近い色へと変化を遂げた。瞳は魔術師たちが持つ、独特の紫紺。

「お前の名は聞かん。雇われ魔術師が、皇子の名など知っていても面倒なだけだから」

「それならば、貴方の名は？ 雇い主に名乗る仮の名は教えてもら

わねば」

云い得て妙なことを云い出した皇子に、蒼流はくすりと笑った。これならば、しばらくの間、退屈はしないかもしれない。

「ソルフェース。そう呼べ。とりあえず、うるさいのを片付けるか」呪言を唱える。人には発音出来ない種類の音だ。人の形を取った瞬間から、力の発動は人のそれに縛られる。だが、その制限さえ蒼流

——ソルフェースには楽しみでさえあった。

呪言に合わせる様に、鏡のように静かな泉に渦が巻きあがる。

竜巻のように高く上がったそれは、動きを止め、二人を睥睨した。それは水で出来た竜だ。

「東の奴ら、片付けろ」

指でソルフェースが指し示したのは、隣国の軍が迫る国境である。武者震いのように、身体を震わせた竜が飛び上がる。それはあつと云う間に見えなくなつた。

皇子は呆然とその行方を追う。

最初、視線でだけ追っていたが、はつとして走り出した。

もちろん、追いつくはずなど無い。

荒い息をする皇子の肩に、ソルフェースは落ち着けと手を置いた。

「半時も掛からん。静かに待て」

「十四万の大軍だぞ！」

皇子は信じられないと詰め寄ったが、ソルフェースには子犬がじゃれているようなものだ。

そうこうするうちに、水竜が戻ってくる。

再び、ソルフェースは呪言を唱えた。

今まで竜の形をしていたそれが、見る見るうちに一回り小さな蛇に姿を変える。

その耳に何事かを囁くと、蛇は再び泉の中へと姿を消した。

「さて、皇子。参りましょうか？」

くすくすと笑ったソルフェースに促され、皇子は城への帰途を辿る為にきびすを返す。

「何をした？」

「俺の代わりをここに置いただけだ。魔物どもが主を失ってうろろされるのは、お前も困るだろう？」

知能の足りない連中が、ソルフェースと見紛うくらいの力は分け与えたし、暗示も掛けた。その分、ソルフェース自身の力も減っている。これならば、人の大魔術師程度の力の筈だ。

力を何も持たぬ所為か、人は異質なものには敏感だ。

「皇子！ 何処ですか？」

森の中を、大声を張り上げて皇子を探している馬鹿がいた。

そんなに声を上げれば、ここに獲物があると宣伝しているようなものだ。

実際、皇子を見つけて、喜色に輝いた騎士の刀は、魔物たちの青みがかった血が、どす黒く変色してこびりついている。

「よく、御無事で！」

駆け寄りながらも、ソルフェースに対する警戒の視線を送ってきた相手は、いかにも生真面目そうな男だ。

「こちらの魔術師に助けていただいた。ソルフェースだ」

「皇子が大変お世話になりました。ただ、皇子は急ぎ城へ戻っていただかねばなりません。申し訳ないが、このお礼は後ほど改めて」
頭を下げる傍ら、皇子を急かそうとする騎士を、皇子自身が押し留める。

「いや、ソルフェースには魔術師として、城へ来てもらう。かまわん、話せ」

ソルフェースを部外者と見た騎士に、皇子が命じた。そういう尊大な態度は、確かに生まれながらの王族という奴だろう。

「はい。東より押し寄せていた大軍が、竜巻に吞まれ、瓦解いたしました！ 講和を申し込んできております。ここは皇子に御帰還いただき、講和を勧めていただきたく」

「解った」

うなずく皇子をソルフェースが手招く。もちろん、騎士も寄つて来た。

ソルフェースが呪言を唱えると、周囲の景色が一変する。

皇子連れで、森越えなどされては、命がいくつあっても足りない。

特に、この騎士は隠密行動には向かなそうだ。

出現したのは、城下の外れの廃墟。ここからは、城まで歩いても行ける距離だ。

その日の内に、講和は成立した。それをもって、皇子は隠居する父に代わって、ティアンナ王となる。

ティアンナ皇国は崩壊したが、ティアンナは歴史の片隅で『古の魔術を保つ国』として、黒の森の魔物を押さえる守護の役割を与えられる羽目になった。

「蒼のソルフェース殿。国王がお呼びでございます」

それから、三十年。水の属性をもつ魔術師として、ソルフェースは『蒼』の名を頂いている。

少年であつた皇子も、息子と娘を持つ中年男だ。そして今、病におかされ死の床へと付く身である。

「どうした？ 俺の力を頼る気になつたか？」

人払いがなされた部屋には、病身の王と、枕元にソルフェースがいるのみだ。

「泉の主。そんな誘惑は無駄だ。私は、人として死ぬ」

この三十年。ソルフェースが囁く数々の誘惑にも、王が揺らぐことは無い。

「だろうな。お前が揺れたのは、お前の騎士が死んだときくらいだ」
あの森まで命を賭して、王を迎えに来た騎士は、いつも王の傍に
あった。病で倒れるその日まで。

「奴の命くらいなら、無償で永らえさせてやってもいいくらいには、
お前のことは気に入っていたんだが」

「いや、あれで良かったのだ。死んでしまえば、誰のものにもなら
ん」

騎士は、妻帯せず亡くなった。人生の全てを王と共にあったのだ。

「頼みたいのは、この国の行く末だ」

「心配せずとも、あと二百七十年も残っている」

その間だけは、力を貸してやると約束した。

「そうか。これで安心していける……」

何処へ？とソルフエースは問い掛けなくなる。そのくらいに自然な
言葉だった。

己の騎士のところへ？ それとも……。

まぶたがゆっくりと閉じられる。眠るような崩御であった。

今の王は、ソルフエースが仕えてから四代目にあたる。

約束から、まだ百十余年の時が過ぎ去っただけだ。

だが今、ソルフエースの隣には別の温もりがある。

ソルフエースの傍らに眠るのは、美女ではない。兵士としては幾分
小柄ではあるものの、鍛えられた体を誇る、大の男だ。

真っ直ぐな気性の真面目な堅物男。ソルフエースに剣を捧げてくれ
た、ソルフエースの騎士。何処か、あの王の騎士に似ている。

「お前の、国……か」

ずっと護つてゆくのも悪くはないと思えた。

そのまま、温もりを引き寄せ、抱き締めるように眠る。

いつか送る、その日まで。

<
お
わ
り
>

ヤクザもの【氷雨】＜前編＞（前書き）

降りしきる雨がつれてくる過去の記憶。

ヤクザもの【氷雨】＜前編＞

「すみません」

ベッドの中で、ぼーっと働かない頭を抱えたまま、亮は一緒に暮らす克利へと詫びの言葉を述べた。

本来なら、克利を護らねばならない立場の自分が、風邪で動けないなどとは、たるんでいると云われても仕方が無い。

「気にするな。俺はもう行くが、大人しく寝てるんだ。誰か訪ねてきても出る必要は無い」

克利はサイドボードへと、小さなクーラーバッグを置いて、そっと克利の額を拭う。

その手がひんやりしていて気持ち良かった。

「腹が減ったら、ゼリー飲料があるから、それを食べ。食ったら薬は飲めよ」

まるで子供にするような細かな注意を並べる克利に、亮はクスリと笑う。

「それから、」

「うん、もう判ったから。とし兄ちゃん」

普段ならば決して口にしない懐かしい呼び名が、つい口を吐いた。

それに、克利はいとおしげな視線を送る。

「早めに帰る」

伸ばした手が、優しく亮の髪を梳いた。

ふと目を覚ました。

喉の渴きを覚えて、クーラーバッグへと手を伸ばす。

中に入っていたスポーツドリンクを一気に飲み干し、汗で濡れたTシャツを脱いだ。着替えは枕元に置いてある。

それに着替えて、ゼリー飲料を口にした。バナナの味のそれは甘か

つたが、妙に腹にたまる。不味い水薬を飲み干した亮は、尿意を覚えて立ち上がった。

多少のふらつきはあるものの、歩いてトイレへは行けそうだ。トイレの窓が少しだけ開いていた。おそらく、克利が開けたのだろう。

高級マンションだ。トイレも広く閉塞感はない筈だが、克利は何故か、少し開ける癖がある。

危険だからと亮が幾度云っても改めてくれる様子は無かった。

いくら、高層階だとは云え、何か仕掛けられないとは限らないのだ。

「あの人は、自分がヤクザの主治医だつて自覚がねーのかよ」

亮は、誰にともし無く呟いて、窓に手を伸ばす。

激しいとはいえない雨なのに、妙に音が耳につくのは、きっと亮の熱が高い所為だろう。

窓を閉めて鍵をしつかりと掛ける。

用を足した後、冷えた身体をベッドへと潜り込ませた。

頭が痛い。

早鐘が鳴っているようだ、と、亮は思った。

いや、鳴っているのは鐘ではない。雨の音が耳について離れないのだ。

今まで、自分には無縁だった筈の、上等のベッドと毛布。寒いはずは無いのに、心の芯から冷えていくような心地に、亮は、自分の身体をかき抱いた。

階段の下はこのボロなアパートで唯一、雨の振り込まない場所だった。

明日になれば、母親の機嫌も直って、家に入れる。

亮は、じつと自分を抱き締めて、うずくまっていた。

「お腹減った」

ぼつりとつぶやく。今日も夕飯は食べさせて貰えなかった。給食だ

けは腹一杯食べたものの、それだけで育ち盛りの小学生が持つわけが無い。

実際、亮の身体は、同学年の男の子たちにくらべても明らかに小さく、がりがりにやせ細っていた。

「そんなところで風邪をひくぞ」

階段の上から声が降ってくる。聞き覚えのある声に、亮は顔を上げた。

「かつちゃんのお兄ちゃん」

隣に住んでいる、幼馴染の克高の兄だ。冷たい目をしたこの大学生を、近所の子供たちは一様に怖がっていた。

「ああ、また追い出されたんだな。来い」

「え？」

何を云われたのか判らず、亮が目を見開く。

「いいから、来い。そこは寒いだろう？」

階段の上から、差し伸べられた手に、亮はたたと走って階段の下へと回り込む。

まだ、半信半疑なのだ。

だが、男の手はまっすぐに亮へと伸ばされた。

「ほら、来い」

手を取ると、力強い腕が亮を引き上げる。その手は暖かった。

「ただいま」

「おかえりなさい。あら？」

物言いだけな克高の母親の様子に、亮は身を竦ませる。

「遊びに來ただけだよ。飯、部屋で食うから」

「ええ。でも…」

友達の家遊びに行ったときに、こんな風に迎えられることは少ない。

そして、次からは友達は自分を家に呼んでくれなくなる。

泣きそうになった亮の手を、克高の兄は握り締めた。

「俺のところに遊びに来たんだ。な？ そうだろ？」

強い口調で云われて、コクリとうなずく。

「俺の部屋、行こう」

手をつないだまま、男が襖を開いた。3畳ほどの小さな部屋は、窓際に机が置いてあるだけだ。本棚には漫画じゃない、難しそうな本がたくさん詰っている。

「その辺、座つてろ」

そういうと、男は立ち上がり、やがて食事の入ったトレイを持って、部屋へと入ってきた。

「ほら、腹減つてんだろ？」

確かにこれ以上ないくらいに、亮は空腹だったが、どう見ても一人分しか無い、男のものらしい夕飯に手をつけるのはためらわれた。

「俺はこれ食うから」

カバンの中から、男が大きなパンを出して笑う。つつけんどんな云い方だが、優しく微笑まれたのに安心して、亮はがつがつと食べ始めた。

その日は、男と同じ布団にくるまって眠った。

親にさえ、抱き締められたことのない亮は、その日、はじめて抱き締めってくれる温もりに包まれたのだ。

抱き締めてくれた人は、隣に住む幼馴染克高の兄・克利と名乗った。

「克高と紛らわしいから、俺のことはとして呼べ」

「うん！ とし兄ちゃん！」

母親がうるさいと眉をひそめる元気のいい返事をする、克利は優しく頭を撫でてくれた。

時折、男に振られた母親がヒステリックに喚くときも、殴られて追い出されるときも、『とし兄ちゃん』のところに行けば良かった。温かな腕が自分を抱き寄せてくれる。

克利の両親の迷惑そうな視線からも、克利は亮を庇ってくれた。冷

たい瞳が、亮を見るときだけは、温かな色彩を浮かべる。
『とし兄ちゃん』さえ自分のそばに居てくれればいいと、その時の
亮は思っていた。

ヤクザもの【氷雨】＜後編＞

「草野さんとこに入り浸りだっというじゃないの」

「いやよねえ。あの年で、もう媚びることを知ってるなんて」

「あら、やつぱりそうなの？」

「だって、草野さんとの上の子って、あの子でしょ？」

「そうそう。感じの悪い、ちょっと怖い子」

「何か無ければ、あんな子の面倒見るようなタイプじゃ無いわよ」
近所の主婦たちの話題は、よく判らない言葉が多い。その時も亮が足を止めたのは、幾度も出てくる『草野さんの、ちょっと怖い上の子』というのが、克利のことらしいと思いついたからだ。

「シッ、」

だが、数人の近所の主婦は、亮を見てしゃべることを止める。

それ自体は珍しいことでは無かった。いつでも亮の母親と、よく変る相手の男が、ご近所さんの一番の話題なのだ。

視線に居たたまれなくなつて、亮はそこを走りぬける。

じつとこちらを見ている視線が、まるで追いかけて来ているかのようだ。

家に駆け戻つて、ばたんと扉を閉めて、ほつと息を吐く。

言葉の意味は判らなくても、克利が悪く云われていることだけは解つた。

「何だ？ 帰つて来たのか？」

「た、ただいま。おとうさん」

家にいる男は皆、おとうさんと呼べと母親には云われている。本心は嫌悪感で一杯だが、逆らえば殴られるのは目に見えていた。

どうやら、今日は仕事は休みらしい。亮は、目線を合わせないようにして、机にカバンを置いた。学校指定のそれも、克利のお下がりだ。

克利の母親が、克高とおそろいがいいよね？と気を使って持ってきて

てくれたものだ。

余所の家のことまでは深く関わりたくないだろうに、それでも、善良な優しさを示してくれる。

きつと、あの人たちも、亮に関わることで悪く云われているだろう。「亮。勉強はどうだ？ 進んでるか？」

猫なで声で男が聞く。今日は機嫌がいいらしい。酒臭い息を吐きながら、亮の肩を抱いてきた。

「うん、ちゃんとやってる」

「そうか」

大きな手が、亮の股を撫でている。ぞつとしたが、亮は逆らわなかった。教科書を広げ、ひたすら勉強しているフリをする。

Tシャツの中に、男の手が潜り込んできた。

「おとうさん、な、何？」

「今更、ぶるのは止せよ。どうせ、あの隣の野郎にやらせてんだろ？ ガキの癖に、さすがは淫乱女の息子だぜ」

「やらせてる？」

友人の少ない亮に、そんな猥談をするような相手はいない。ススんだ子ならば、小学生でも理解しただろうが、亮には云われている意味すら解らなかった。

解ったのは、『とし兄ちゃん』が悪く云われていることと、この男の手が、気持ち悪いことだけだ。

かつとなつて、突き飛ばす。

そのまま、男の怒号を背に、走り出した。

素早く、階段下に隠れる。

「あの、くそガキ、何処だ！ 出て来い！」

遅れて階段を下りた男が、怒鳴りながら亮を探しているのが判つて、ますます身を縮こまらせた。

散々喚いて、悔しげに拳を上げるその姿に、通行人が眉をひそめる

が、さすがに警察に通報するようなおせっかいはいない。

やがて、男は飽きたのか、渋々と部屋へ引き上げた。

震えていた亮がほっと息を吐く。だが、同時にどうしようと途方に暮れた。

『とし兄ちゃん』の家には行けない。行けば、またあんな風にとし兄ちゃんが悪く云われる。

ぼつりと亮の頬に雨粒が落ちた。

あつという間に雲は厚みを増し、降る雨は激しくなっていく。

それでも、亮には行き場が無い。

階段の下に身を置いて、じっと自分を抱き締めた。

「また、こんなところにいたのか？」

亮の上に優しい声が降って来る。

だが、突然の雨に冷え切った身体は、返事をしようとしても歯の根が合わなかった。

「来い」

克利の差し伸べた手に、亮はひたすらかぶりを振る。

「いいから、来い」

腕を捕まれて立たされた。そのまま、克利の腕の中へ抱き込まれる。

「ほら、冷えきってるじゃないか」

抱き締められた腕から、体温が伝わって、亮の冷えた身体を温めてくれる。

「怖かっただろう？ どうしてウチに来ない？」

「とし兄ちゃん」

呼びかけると、涙が溢れてきた。

どうやら、克利はあの騒ぎを知っているらしい。

やさしく宥めるように頭を撫でられて、ほっとするあまりに、亮は声を上げて泣き出した。

泣き止んだ亮を連れ、克利は隣の部屋のドアを開く。

台所のテーブルから、克利の母親が立ち上がった。

「大丈夫だった？」

心配そうに覗き込む。亮はこくりとうなずいた。

「かあさん、飯ある？」

「ええ。すぐに支度するわ。亮ちゃん、お風呂に入れてあげてくるりと身軽に克利の母親が台所へと立つ。

母親の言葉に従うように、克利は亮を伴って、風呂場へと向かった。風呂から上がると、既に克利の部屋に夕飯の仕度がされている。

今日は一人分には明らかに多い食事が盆の上に乗っていた。

「ほら、亮。食べてもいいぞ」

「こんなに一杯？ いいの？」

「ああ。食べきれないなら俺と一緒に食べるか？」

「うん！」

とし兄ちゃんと一緒にの食事。考えるだけで亮は楽しかった。

一緒にお風呂に入って、ご飯を食べて、眠る。

まるで、本当に兄弟になったみたいだと亮は考えて、わくわくする。もちろん、今だけの限られた関係だということは、幼い身でも、亮には判りきっていた。

もぞもぞと何かが自分の上で動いているのに、亮はくすぐったくて目を覚ました。

隣で寝ているはずの克利が、何故か亮の上に押し掛かっている。

何が起こっているのか判らずに、亮はひたすらじっとしていた。

胸をまさぐっていた克利の大きな手が、そっと胸の突起に触れる。

思わず身じろぎした亮を克利は押さえつけた。

克利の舌が亮の首筋や胸に触れる。

荒い息を吐く克利を、亮ははじめて怖いと思った。

だが、逆らおうとは思わない。この腕が無ければ、どうかなってしまいそうな自分がいることを亮は知っていた。

雨音が激しく叩きつけるように、窓を叩いていた。

「亮。大丈夫か」

うつすらと目を開ける。覗き込んでくる克利に、亮は微笑んだ。痛みは大分ひいている。

「大丈夫っす…」

「飯は食ったか。薬は？」

云いながらも克利は、枕元に置かれたクーラーボックスの中身を確認した。

きちんと減っているのを見て、ほっと息を吐く。

「ちゃんと飲んだみたいだな。腹は減ってないか？」

「少し、空きました」

そつと克利の手が亮へ伸ばされる。その手の冷たさにゆだねるように目を閉じた。

「おかゆ買ってきたぞ。一緒に食べよう」

「うん、とし兄ちゃん」

一緒に。それが嬉しかったあの日を思い出し、亮は素直にうなずく。キツイ克利の瞳が、やさしい色彩を浮かべた。

<おわり>

時代もの【夏草】

「お坊様、買っていただけませぬか？」

宿場の外れで、声を掛けられる。その声に振り向いたのは、涼やかな風貌の、何処と無く品のいい坊主であった。

前髪の稚児は、いまだ幼さを残している。持った花は朝顔。

だが、それは花を買って欲しいのではなく色を売っていることは、何となくであっても、想像はついた。

文字通りに自分の花を売っているのだ。

確かに、坊主は女色を禁じられている所為もあって、幼い稚児を買うものも多い。だが、このような宿場町で声を掛けられることはあまり無かった。

戸惑っていると、いかにもな下郎がやってきて、稚児の手を引く。

「このようなお方に、お前の貧相な花など買っていただける訳がねえ。お坊様、失礼いたしやした」

駕籠かきの格好はしているが、まともな駕籠かきでは無く、雲助どもだろう。他にも数人の子供たちが、大きな鉢を手にしていた。

不審に思われる前に遠ざけようとしたことは間違いない。

「いや、買おう。いくらだ？」

途端に、下卑た笑いを浮かべた男が、もみ手をしながら近寄ってくる。告げられた額は、そらの女郎よりも安いくらいだった。

それに坊主は首を振る。

「そうではない。一夜ではなく、この稚児の値段はいくらだと聞いておるのだ」

男はより一層、下卑た視線で坊主を探るように見た。この好きものの破戒僧が、と思われているのは承知の上だ。

「気に入った。ずっと愛でたいのでな」

とどめにニヤリと、品の良い顔に似合わぬ笑みを浮かべたとき、雲助の一人が立ち上がる。

「十両と云つたら、どうなさる？」

「今は持ち合わせが無い。有り金はすべてその方らに渡す。足りぬ分はこれを持って、両替屋へ行くがいい」

懷から、匂い袋と金子の包みを取り出し、雲助へと手渡す。確認した雲助は、満足したらしく、鉢を抱えたままの稚児の手を引く坊主が引き止められることは無かった。

論語を読む瑛幸の声は澄んでいて、何時までも聞いていたくなる響きだ。

山村にしては、瀟洒な造りと立派な門のある寺に、瑛幸が引き取られたのは、数年前だ。

読み終えた瑛幸が顔を上げると、この寺の主である宋瑛がにこりと笑つてうなずく。これは満足の行く出来であつた証拠だ。

それに頭を下げて、瑛幸が腰を上げた。

寺に引き取られてはいるものの、僧ではないので髪は総髪のまま、結い上げられている。艶やかな黒髪の美しい若者であつた。

宋瑛の一字をとつて、瑛幸と名づけられ、今に至っている。

あのままであれば、数年客を取らされた後に、何処かへ売られていたであろうことは確実で、それを考えれば、感謝してもしたりないほどの恩人であつた。

だが、宋瑛は決して瑛幸の軀を求めるようなことは無い。

それしか知らぬ瑛幸には、美しい主人にどうすれば恩を返せるのか考えあぐねる日々だ。

「そなたを抱く気はない」

何度これしか恩を返す方法を知らぬと誘つても、なびく様子はない。

「そなたが立派に一人前になってくれることが、私に報いる方法ぞ」
きっぱりと云われてしまつてからは、ひたすら勉学に励むことのみを己に課した。

だが、それだけでは足りぬのではないだろうか、下男の幸造を相手に漏らしたこともある。

「貴方様が、そのお心掛けを持っておられるだけで、宋瑛さまはご満足でしょう」

幼い頃から、僧に仕えているという幸造にまで、そう云われては返す言葉も無い。

ひたすら、幸造と共に宋瑛が暮らしやすいように、と心を配ることしか出来ない己の不甲斐なさを噛み締めながらも、静かな暮らしが続いていた。

「宋瑛さま、文が届いております」

珍しく、慌てた様子で障子を開いた幸造は、少し青ざめた顔をしていた。

常ならば、物音を立てることを厭う宋瑛もそれを咎めない。

瑛幸は論語を読むのを止めた。

文を開こうとした宋瑛は、怪訝な表情でこちらを見る瑛幸の眼差しに気付いて、文を閉じる。

「今日は、もう良い。下がりなさい」

硬い声で申し付けられ、渋々と腰を上げた。

障子を閉めた向こうで、宋瑛と幸造が声をひそめるのを心残りに思いながらも、その場を辞する。

夕飯の仕度が終わっても、宋瑛と幸造の話は終わらぬようであった。そっと、宋瑛の部屋へと足を運ぶ。

宋瑛の部屋には、灯かりさえ灯ってはいなかった。

がらりと障子の開く音に、瑛幸は思わず、物影に身を潜めてしまう。荒々しい仕草が、物静かな宋瑛のものであることが意外であった。

「もう良い！ お前が云えぬのであれば、私が…」

「お待ちください。瑛幸さまは貴方様を慕っております。どれだけ傷つかれることか」

「だが、このままここには置いておけぬ。こうなつては、もう」
がくりと膝を折った宋瑛を、幸造の逞しい身体がしかと抱きとめる。
「私が申します。ですから、本日はお休みください。瑛幸さまにここから出て行くようにしかと申し伝えますゆえ」
瑛幸は頭を殴られたような気がした。自分を出て行かせる相談をしていたこともだが、膝を折った宋瑛を抱きとめた幸造の腕は、まるで宋瑛を抱き締めているようであった。
そのまま、ふらふらと床に付く。考える気力すら沸いては来なかった。

酒の匂いに目を覚ます。

いつしか眠り込んでいたようだ。宋瑛はどうしたのだろうと起き上がろうとした瑛幸は、傍らにある人影に、ぎくりと身を竦ませた。

「瑛幸……」

匂いの元は、目の前にいる宋瑛だ。慎ましかで、決して酒など口にはせぬ主人が、酔っていることに、瑛幸は首を傾げた。

「宋瑛さま。そのように酔われては、身体に良うありません。お休みにならませ」

「身体など、今更厭うてもせん無きことよ」

自棄を起こしたかのように、自堕落な笑いを浮かべる宋瑛に、瑛幸は慰めるかのように腕を伸ばす。

だが、その腕は力強く引かれ、宋瑛によって床へと縫い止められていた。

「一夜の夢を、与えてはくれぬか」

「はい、宋瑛さま」

すぐる様な瞳を見るまでもない。この身はとうに宋瑛へ捧げている。瑛幸は、はじめて自ら男の前に軀を開いた。

「一夜の夢よ。夜が明ければ、白む闇に紛れる夢」

宋瑛が自分の中へと逐情する。瑛幸は、一夜でも慰めを与えられた

ことに安堵した。

翌朝、すでに宋瑛はおらず、瑛幸は幸造を伴い、郷へと下りた。季節は拾われた頃から、いくつも巡り、持ってきた朝顔は幾度も寺の庭で花を付けていた。

そして、今年も。

参道の階段を下りながら、瑛幸は二度とは会えぬことを予感していた。

宋瑛が、拳兵したと人づてに聞いたのは、幾日も経たぬうちだ。謀反の疑いを掛けられ、切腹した兄の菩提を弔う為の寺で静かに暮らしていた宋瑛に、またしても謀反の疑いが掛けられたのだと知ったのは、宋瑛が追い詰められた先で、自害したと知った後のこと。

幸造と共に身を寄せた両替屋の離れで、瑛幸はぼつりとつぶやいた。「一夜の夢。それでも私は貴方とともにいきとうございました」

<おわり>

可愛い攻め【いつか雨が止んだら】

「先生が好きです」

拙い告白。淡い想い。

だけど、僕は本気だった。

先生と一緒にいたくてまとわりつき、先生のことを独り占めしたい気になっていた。

それが、憶測が憶測を呼んで、いつの間にか噂に踊らされるように先生は移動を余儀なくされていた。

僕の所為だ。

はじめての恋に浮かれて、禁忌など笑い飛ばしていた。

それが、大人の先生をどれだけ苦しめるかなど考えもせずに。

誰もいなくなつた礼拝堂の窓際。

たたきつけるような雨は、僕を責めているかのようだ。

ぼんやりとしていた僕の後ろから、そつと大人の腕が僕を抱き締める。

腕の主が誰であるかなんて、声を掛けられなくとも判った。

いつも黙って僕を受け入れてくれた。

「もし、君が学校を卒業しても、俺のことが好きなら、もう一度告白して欲しい」

僕の告白もはねつけることも簡単だった筈なのに、きちんと答えをくれた。

一時の気の迷いと決めつけ、誤魔化す事だつて出来た筈だ。

でも先生は決してそんなことはしない。真っ直ぐで、真面目で。

僕の好きになつた唯一のひと。

「結局は君を苦しめる事になってしまった。すまん」

何で先生が僕に謝るの？ 考えが足りなかったのは僕の方なのに。

「先生」

頬を涙が伝う。

ただひたすら、外を降る雨の行方ばかりを追う。

振り向くことなど出来なかった。

「すっかり片付いてるんですね」

「ああ。引越しは明日だ」

涙を流す僕を、先生はひたすら抱き締めていた。

こんな場所で、誰かに見つければ先生は今度こそ辞めさせられる。

そう判っているのに、僕は先生の腕に甘えることしか出来なかった。やつと涙が止まったときには、雨はすっかり止んでいる。

先生は、僕を片付いた先生のアパートへと連れて行ってくれた。片付けられた部屋にはベッドと空になった三段ボックス。後はダンボールの山ばかりだ。

「俺がはつきりしなかった所为で、君にも迷惑を掛けた」

先生が頭を下げる。

情けなさにまた涙があふれた。

「泣かないでくれ。君を泣かせたい訳じゃない」

肩を抱き寄せられる。

先生、そんなことをすると、僕はきつと誤解をするよ。

顔を上げると、涙で濡れた視界に、先生の心配そうな表情が見えた。

僕は衝動のままに先生に口付ける。

これで、最後だ。

明日で、先生とは会えなくなる。

幼いキス。なのに、先生は僕の背中へと腕を回した。

「先生、慰めてください。大人なら判るでしょう？」

無茶なことを云っている自覚はあった。

先生は受け止めてくれたただけだ。応えてくれている訳じゃない。でも、僕が体重を掛けると、先生はふっと笑ってそのまま床へと倒れこむ。

「先生……」

「君がそれで泣き止んでくれるなら」

僕はたまらなくなつて、先生の唇へもう一度キスをした。

翌朝、引越しの業者が来た音で目が覚める。

「ほら、起きなさい。もう時間だ」

一瞬、夢だったのかと思った。先生は夕べのことなど無かつたかのように笑っている。

業者が荷物を積み込むのに、先生はてきぱきと指示を与えていた。ジーンズとシャツだけの、先生の私服姿。それも今日で見納めだ。ああ、スーツ姿だつて昨日で見納めだったんだ。もっと焼き付けておけばよかったと、今更ながらに思う。

業者がトラックに荷物を積み終え、先生はかちりと鍵を掛けた。これでさよならだ。一夜の思い出だけで、あの人は遠くに行つてしまう。

「見送り、ありがとう」

先生が微笑んだ。泣きそうになるのをぐっと堪える。

「君が泣き止んでくれるなら」

そういつた先生の姿が、見送る後姿にダブった。

「先生」

「告白ありがとう。俺も君が好きだ」

振り向き様に、そう云つた先生の顔に、悲しげな色が浮かぶ。それきり、先生は僕の前から姿を消した。

あれから、六年が過ぎた。

教師になった僕は、はじめての転勤を迎える。

どうしても、そこで教師になりたいくて、ずっと申し出ていた先だ。門をくぐると、ちよつと前に出勤したらしい先輩教師の後姿がそこにある。

忘れられないその後姿に、僕は出そうになる涙を堪えて、声を掛けた。

「先生！」

<おわり>

メガネ「小春日和の中で」

クラクションが鳴らされた。

日曜の朝の寮の部屋。

恋人兼同僚の部屋で目覚めるのが、俺の通例になっている。

疲れているのか、ぐっすりと眠る恋人の腕から抜け出して、枕もとのメガネを探る。

窓のカーテンを開けると、下にメタルグレイのセルシオが停まっているのが見えた。

営業部の渥美部長の車だ。

「ああ。そうか」

思いついて、俺は窓を開け、渥美部長に声を掛けた。俺はコンペでよく営業部に借り出されるので、渥美部長とも顔見知りだ。

「おはようございます」

「おはよう、葛西」

渥美部長が軽く手を上げる。部長は、苦みばしったとでも云うのだろうか、渋い感じのいい男で、動作がいちいちキマっていた。

「鈴木さんなら、まだ寝てますよ。きつと」

渥美部長は、同じ営業部の鈴木さんとは、大学の先輩後輩の間柄だそうで、週末はほぼ一緒に過ごしている。

今日だって、絶対に来るだろうとは思っていた。

「昨日、遅くまで荷物まとめてましたから」

おもむろに渥美が肩を落としたのが判って、俺は声を上げて笑ってしまった。

「杏？」

ベッドから声が掛かる。どうやら、目を覚ましたらしい。

「渥美部長。どうやら、お迎えらしい」

「昨日、鈴木さん。あんなに遅かったんだぞ。起きてる訳ないだろ」
起き上がって、枕元に置いた細身のメガネを掛け、ジーンズとシャ

ツに袖を通す。俺も右に倣ったとき、ノックの音が響いた。

「セクハラ野郎のお出ましだ」

康利がおもむろに嫌そうな顔をする。

渥美部長は、セクハラ部長としても有名だ。老若男女拘わりなく、あれこれ触りまくるが、即座に反撃するようなタイプしか相手にしない。まあ、一種のレクリエーションだが、触られる方は、たまつたもんじゃ無い。

ドアを開けて、渥美部長を招き入れた。

「しばらくは起きませんよ。昨日、何時だったっけ？」

「午前二時にはまだ音がしてた」

「午前二時？ 何だつてそんな時間まで」

渥美部長をテーブルへと促し、康利が自慢のコーヒーを入れる。

確かに、そんなに宵つ張りでも無い鈴木さんが何でそんな時間までと思うかもしれないが、今日は仕方が無いだろう。

「今日で鈴木さん、寮を出るんでしょう？」

まさか、渥美部長が知らない訳は無いよな???

「ああ。だから、迎えに来たんだが。あいつの荷物なんて、本と着替えくらいだろう？」

いや、確かにそうだけど。本の整理つて意外と時間掛かるんだよな。

「でも、鈴木さんつて、そういうの神経質そうじゃありませんか？」
康利の意見には俺も賛成だ。

「ああ、だろうな。手伝いも断られた」

さもありなん。鈴木さんの線の細い神経質そうな顔を思い浮かべて、俺はうなずいた。

「かといって、そのままつて訳にもいかないだろう。とりあえず、これ、飲んだら荷物運ぶから手伝ってくれないか？」

肩を落とした部長に同情はするが、あんなものぐさを絵に描いたような人相手だ。学生時代からなら、諦めも入っているだろう。

「義彦？」

声を掛けた部長が、薄くドアを開ける。俺たちの二階上に位置する鈴木さんの部屋は、一番上の角部屋。元は寮監の部屋だったらしく、この独身寮で一番広い部屋だ。

ドアを開くとミニキッチンと、居間。そこには人の気配は無い。奥のドアを開けると、部屋の真ん中で、鈴木さんが倒れていた。

「義彦！」

駆け寄って、抱き起こした渥美部長の肩が、がっくりと落ちる。あ、もしかして。

「熟睡しているだけだ」

やっぱり。だと思ったんだよな。まとめられているので、布団も無いベッドに、部長は鈴木さんをゆっくりと横たえた。本人は無自覚・無意識だが、ものすごく綺麗な人だ。眠っている横顔は、まるで眠り姫を連想させる。ただし、顎の無精髭が無ければ、だけど。ダンボールの山は、確実に本だ。宅配便の箱に、10個ほど。

「これ、部長のセルシオに積むんですか？」

「ああ。悪い」

「いいよ、俺が運ぶ。杏は他の荷物が無いか、確認してくれよ」
康利がそう云って気を使ってくれるのが面映い。俺は女の子じゃないとは思うけど、やっぱり大事にされているようで、嬉しかった。部長と康利が本を運び出す。

部屋の中は綺麗に片付いている。元々、料理などしないのだろう。キッチンの中は空っぽだ。冷蔵庫とトースターは寮の備品だし、布団は大型ゴミに出すつもりなのか、ゴミシールが張ってあった。大抵のものは出し終わっただけ。本を積んだダンボールと、ノートパソコンがあるだけだ。

「几帳面って云うよりは、面倒でモノが無い類だな。これは」
後は、造り付けのクローゼットの中身だ。

引き出しの中は、空っぽ。横に小さめのダンボールがあるところを見ると、この中身が服の類だろう。ところがクローゼットの上を開

くと、スーツが掛かったまんま。

しかも、一点一点が全部セットになっている。

「何かあったか？」

クローゼットの前で、あんぐりと口を開いた俺を見た部長が声を掛けてきた。俺がひとセット取り出して見せると、またしても部長ががつくりと額を抑える。

「悪い。葛西、笠置。使って悪いが、荷物下に降ろしておいてくれないか」

どうやら、鈴木さんはそのまま後部座席にでも放り込むつもりだと見たが、こんないいスーツをそれはどうだよ。

部長は荷物を俺たちに任せて、車を出した。行き先は、多分坂の下にある住宅街の大きなスーパーだろう。スーツ用のケースを買ってくるつもりだと見た。

「荷物運ぶか」

「うん」

俺たちは二人でバケツリレーの要領で、俺が部屋の入り口まで、康利が階段下まで、次は俺がもう一階下まで、康利が寮の玄関までと繰り返し、数十分もしないうちに、荷物を運び終わる。

そうこうするうちに、部長が戻ってきて、俺はスーツを、ひとつひとつ袋へ入れた。これだけバタバタしていると云うのに、鈴木さんはまったく目を覚ます様子は無い。

本は、トランクと後部座席の足元。その上にスーツを乗せる。

部長は、助手席をリクライニングさせ、これまた鈴木さんを抱えて降りてきた。ゆっくりと横たえて、シートベルトを締めた。

「すまん。助かった。これで飯でも食ってくれ」

部長は俺たちに一万円札を握らせて、ゆっくりと車を発進させる。

これはかなり気を使っているな。

「振り回されてるね。あれは」

「まあ、それがいいんだろ」

去っていく車を見送りながら、俺は何度もため息を付きつつ、それ

でも壊れ物のように鈴木さんを抱えていた渥美部長の幸せそうな表情を思い出し、クスリと笑った。

「やっちゃん、何処に何食べに行く？」

振り向いた先で、康利が笑う。

小春日和の引越し日和。

<おわり>

幼馴染「優しい雨が降るとき」

その男が、俺の目の前を横切ったとき、俺は自分の目を疑った。
見覚えのありすぎる背中。

スーツ姿を見るのは始めてだけど、それでも俺があの人を間違うなんて有り得ない。

幼馴染の従兄弟の晶彦。

俺の初恋の、そうして今も続く片恋の相手。

俺が、晶彦のことが好きだと気付いたのは、小学生の頃だ。

小さい頃から、晶彦は俺には甘かった。

ウチの親と晶彦の親は非常に仲の良い姉妹だった。兄弟のいなかった晶彦は俺のことを弟だと思っていたし、俺も本当の兄貴だと思っていた。

そのくらい晶彦は俺の面倒を見てくれたし、どんなに泣いていても、晶彦が宥めれば泣き止んだ。

晶彦が抱っこしてくれるのはあったかくて、母親に抱かれるのとは違う安心感があった。

だから、晶彦と俺が兄弟じゃないって知ったときには、母親たちに裏切られた気分になったし、それは晶彦も同じだったらしい。

半日二人して押入れに籠もってハンストした。

そこを宥められて出てきたのは、兄弟じゃなければ、ずっと一緒にいられない。とする俺たちの主張に、母親たちが一計を案じた結果だ。

「じゃあ、晶彦が龍樹ちゃんをお嫁さんにしちゃえばいいのよ」

「お嫁さんにしたら、一緒にいられる？」

「ええ、ずっと一緒よ」

それが嘘だと気付いたのは、俺より晶彦が先だった筈だ。でも、晶彦は何も云わなかった。

俺の夢が破られたのは、小学校に上がる頃。

同じクラスのおませな女の子によってだ。

俺に告白してきた女の子に、俺は当然の如く

「俺は晶彦のお嫁さんだもん」

と答えると、一笑にふされてしまった。

「男の子はお嫁さんになんかなれないもん。だから、龍樹くんのお嫁さんはアタシね？」

女の子にしてみれば、当然の結論だったのかもしれない。

でも、俺にしてみればびっくり仰天。おろおろと泣き出してしまった。

学校から走って帰って、晶彦の部屋へと駆け上がり、問い詰める。

「晶彦、男の子はお嫁さんになれないの？ 晶彦は俺をお嫁さんにしてくれるんだよね？」

めちゃくちゃなことを云って晶彦を困らせたと思う。でも、その時の俺には切実な問題だった。

言葉に詰って、俺から視線を外した晶彦に、俺は思いっきり枕をぶつけた。

「晶彦のうそつき！」

ずっと一緒にいるって云ったのに！ お嫁さんにもなれなきゃ、どうしたら一緒にいられるの？

俺はワンワン泣いて晶彦を攻めた。

晶彦の手が俺を引き寄せて、膝の上に乗せてくれる。泣いている俺の涙を、晶彦がぺろりと舐めた。

「うそつきじゃないよ」

「うそつきだもん」

「うそじゃない。誰にも内緒の、お嫁さんには出来るよ」

晶彦は俺をじっと見ていた。

「内緒のお嫁さんなの？」

「うん、大人たちには内緒のお嫁さん」

誰にも云っちゃだめだよ。

「龍樹が18になったら、僕のお嫁さんになってね」

とそういつて、晶彦は俺の涙をもう一度舐めて、それから唇にキスした。

今なら俺にも判る。

晶彦は、俺を宥めただけなのだ。でも、俺はそのときの約束をずっと忘れられずにいる。

晶彦はそれから俺には甘かった。

どんなときでも俺優先。友達より、カノジョ（聞いたことは無いが、あれだけカッコいい晶彦がモテない筈はない）よりも、常に優先順位は俺にあった。

俺が遊園地へ行きたいとねだっても、何かが食べたいと云っても。

晶彦の父親がリストラに合い、高校を出てすぐに働かなければならなくなっても、休みの日は俺と遊ぶし、俺の誕生日だって、欠かさずに祝ってくれた。

でも、今年は違う。

晶彦は春から地方赴任なのだ。

いつも誕生日を友人と祝ったことの無い俺に、祝ってくれる友人は皆無だ。

只でさえ、晶彦と一緒にいた俺には、休みの日に遊ぶ友達なんかいらない。

くさくさした気分が、降り出した雨で余計に重苦しい。
やけくそで止むのも待たずに走り出す。

晶彦が勉強を見てくれなくなっただけから、やる気も起こらずにいたら、補習を受けなきゃいけない羽目になっていた。

全部、晶彦の所為だ。腹立たしくて、恋しくて、泣きそうだ。

一つ先の信号を渡る若いサラリーマンの後姿が涙で霞む。

「え？」

呆然と立ち尽くす。

直感で晶彦だと気付いた。

何で？ 晶彦は赴任先の遠いところにいるはず。

帰ってきているなら、俺にメールさえ寄越さない筈が無い。

「そっか」

唐突に俺は悟った。

晶彦にとって、俺は一番じゃなくなっただけだ。

もう走る気力さえない。

俺はとぼとぼと雨に濡れながら、家路を辿った。

「龍樹、あなたずぶぬれじゃないの！ 母さんの云う通りに傘持っていないからよ」

家に帰ると同時に、母親の小言が降ってきた。

「うん。気をつける」

もう、甘やかしてくれた晶彦はいないんだ。しつかりしなきゃ。

「早くお風呂入って。晶彦ちゃん、来てるんだから」

「え？」

晶彦が来てる？

「今日はお休み貰ってきたんですって。って、龍樹？」

母親に投げるように身体を拭いていたタオルを返すと、自分の部屋へと駆け上がった。

戸を開けると、スール姿の晶彦がびっくりした顔で俺を見ている。

「晶彦！」

「馬鹿！」

駆け寄ると、晶彦に怒鳴りつけられた。

「こんなに濡れて！ 風邪でもひいたらどうするんだ！」

怒鳴りながら、勝手知ったる俺の部屋のクローゼットから、バスタオルを取り出して俺の髪を拭いてくれる。

「服も脱げ。そのままじゃ、ホントに風邪ひくぞ」

「う、うん」

云われるまま、服を脱いだ。

裸になった俺を包み込むように、晶彦がタオルで水滴を拭う。

「冷え切ってるな。風呂入るか？」

「晶彦も一緒に？」

風呂に入ってる間に晶彦が消えそうな気がして、俺は晶彦のスーツの袖を掴んだ。

「何だ。いくつになっても、甘えん坊だな」

俺を甘やかしてくれる晶彦の声。

「だが、今日は駄目だ」

きつぱりと晶彦は云った。

「お前の裸なんか目にしたら、暴走しちまうよ」

「晶彦？」

見上げると晶彦が苦笑いをしている。

「覚えてるか？ お前が18になったら、僕の内緒のお嫁さんになるって云ったこと」

真剣な目で、晶彦は俺を見ていた。

晶彦も覚えてたんだ。

「何で、内緒なのか、今のお前には解ってるよな？ それでも僕のお嫁さんになる？」

俺は無言でうなずく。何か云ったら、目の前で消えてしまいそうな気がした。

「指輪の代わりだ」

バスタオルに身を包んだ俺の腕に、そつと腕時計がはめられた。

「給料三ヶ月分とは行かないけどな。それでも僕の精一杯だ」

「晶彦……」

ぎゅつと晶彦に抱きつく。

涙が溢れて止まらない。

「お前は大人になっても泣き虫だな」

晶彦が俺の涙を舐め取った。そのまま、キス。

「誓いのキスだよ」

<おわり>

オヤジ【秋色の・・・】

「つつかれた……」

五島がどつかりと腰を下ろす。まあ、疲れただろうな。

さつきまで、人事やら工場やら、走り回ってたんだ。しかも、通常の営業もこなしながら。

ほりりだらけのコンクリートも構わず座り込んだ五島が、タバコを取り出すのに習って、俺も紫煙を吐き出した。

ご他聞に漏れずの不況の影響で、人事が首切りを発表したのは、昨年のこと。

誰もが仕方の無いことだと諦めを示す中、五島だけは強行に反対を表明した。

「事務やガードマンの削減は仕方が無い。だが、工場は絶対に駄目だ！」

「今は、工場だってオートメーション化されてるし、あそこはじじいばかりじゃねーかよ。工場が一番減らしやすいんじゃないのか？」

行きつけの居酒屋で、憤る五島を、俺は必死で宥めた。おいおい、こいつ酒乱の気があったのか？

人員の削減は、六十以上の再雇用組と、三十以下の若年層からの希望退職者。会社としては即戦力の中間層だけを残そうと云う、当たり前の措置だと俺は思っていた。

「オートメーション化だろうが、最後に残るのは、人間の目と手だ。ベテランのいなくなった工場なんぞ、何の役にもたたん」

目を血走らせて、歯を噛み締める五島の表情は、何処か鬼気迫ると云った感じで、付き合いの長い俺でさえ、ぞっとするようなものだった。

俺は奴がどうかイカレたんじやないかと危惧したくらいだ。
だが、その五島の言葉が正しいことを知るには、半年も要さなかったのだが。

「また？　ですか？」

俺の勤める部署は、生産管理部という。ここのところ、三日とあけず下請けから苦情の電話だ。

「そう、また、ですよ。困るんですよ。これで何度目ですか？」

何でこんなに傷が多いんですか？　うちで付いたものじゃないですよ。絶対に。お宅の工程さんに何て言い訳したらいいですか？」

下請けのお局様のアニメ声が嫌みたらしく響く。

最初は、申し訳ないんですが。といった口調だったそれも、度重なる不手際に完全にイラついたものになっている。

商社から入った受注を、下請けへの発注するのは工程だ。だが、細かな確認は下請けと商社の間で打ち合わせがなされる。下請けは、商社との打ち合わせの結果で納入した製品の状況を、工程へと連絡して、はじめて金が入る仕組みだ。

入れる品に傷が多い、反りが多い、とあつては納入状況が、はかばかしい訳が無い。

完全オートメーションで数字は間違っていない筈なのに、何でこんなに不良品が多いのか。

検査技師は寝てでもいるのかと嫌味を云われた。

「これか……！」

俺は、五島の云ったことの意味を、今になってはつきりと理解した。
『最後に残るのは、人間の目と手だ』

あれ以来、五島は人事に掛け合いながら、工場の状況を調べ、その上で営業の数字は落さないように走り回っている。

そのうち、諦めるだろうと俺は高を括っていた。俺たちサラリーマンは上の云う事に従うしかない。首を賭けてまでやるようなことは

無いだろうと。

ドアを開けた営業部は、この不況下だと云うのに、電話が鳴りっぱなしだった。

電話を取った営業マンがひたすら目に見えぬ相手に向かって頭を下げる。

その中に五島はいた。

「はい、すみません。すぐに代替の手配をします!」

電話を切ると、パソコン前に陣取った女子社員に指示を出す。

「久間。丸忠さんの59材。すぐに発注掛けてくれ」

「はいッ!」

「もー、駄目っす。五島主任。俺たちが何で謝んなきゃならないんですか?」

ヒステリーを起こした新米が叫ぶ。さすがにキレたのだろう。元を正せば工場の不手際だ。

それを五島はじろりと睨んだ。

「馬鹿野郎! 営業の頭は下げて幾らだ! つまんねープライドなんだ、埋め立てて来い!」

腹まで響く怒鳴り声に首を竦めたのが、ほとんど男性社員だというのが情け無い。

「主任、そいつ、役に立たないなら、ホントに埋めてきていいですから」

女子社員の一人が、平然と云い放った。

「まったく、女の方が余程肝が座ってんな」

「主任! 工場がその納期じゃ上がらないなんて寝言抜かしてます!」

「判った。工場へ行ってくる!」

五島が軽く身を翻す。俺はその後姿を見送って、自分の部署へと戻った。

うかつかしてはいられない。

五島は本気だ。

俺はすぐさま下請けへと電話を掛け、お局様に頭を下げる。データが要る。傷の状況と反りの出た日時。全てを洗い出すには、下請けの協力が必要だ。商社任せにしていたら、何時データがあがってくるか判らない。

数字は間違っていない。ならば、間違っているのは何だ？

ありとあらゆる状況を想定する。事務職の残業は基本的には不可だ。俺はその日からサービス残業の山を築いた。

「五島」

まだ、灯かりがついていることを確認して、営業部へと足を運ぶと五島は机に伏したまま、眠り込んでいた。うつすらと無精髭の残る顔には、疲れが堪っているのか、目の下にくまが出来ている。

揺すっても起きないことを確認して、俺は五島の額へと唇を寄せた。同期入社で、やってきた同僚。俺は管理へ、お前は現場で接点は無くなって来たけど、俺はずっとお前が…。

「うん？ 坂下？」

「ああ。何だ？」

なんでもないフリで、返事を返す。

「すまん、寝込んでたみたいだな」

「珈琲でも飲むか？」

廊下の端の喫煙所に自動販売機があった。

「お前、ブラックだろ？」

「いや、ミルクと砂糖入れてくれ。胃が痛い」

「ストレスじゃねーの？」

言い置いて、珈琲を買いに行く。さりげなく五島の目に付くところへと厚みのあるファイルを置き去りにしてきた。

「お前、これ…」

「傷と、反りのデータだ。出来る限り集めた。それと、それに対する工場の退職者の意見書も添えた」

珈琲を買って戻った俺を見た五島は呆然としている。

「工場へは明日その意見書を持って、生産管理の方から今の生産方法を变えさせる」

「お前、そんなことしたら…」

「俺の首、お前に賭けるからな」

これでしくじったら、俺は確実に首が飛ぶ。

だが、お前だってそうだろう。それを覚悟で人事へ陳情している筈だ。退職者の復職を。

「一蓮托生だ」

俺が笑うのに、五島も笑おうとして果たせなかった。泣き笑いの妙な面になっている。

「馬鹿野郎。お前が泣いてどうするよ。この間の勢いはどうした？ プライドなんざ、埋め立てるんだろ？」

「聞いてたのか？」

五島は鼻をすすりながら、笑った。

「カッコよかったぞ。惚れるぜ」

「お前に惚れられてもな」

顔を見合わせて笑う。五島の顔は最高に男前だった。

「あのとき、お前が首を賭けてくれたから、俺は頑張れたんだ」

五島がタバコを燻らしながらぼつりと呟く。

「でなきや、途中で諦めてた」

「俺は分の悪い賭けはしねーよ」

お前があそこで踏ん張ってなきや、俺は何もしなかった。お前の功績だ。

「なあ、坂下」

「んー？」

「お前、俺に惚れてるだろ？」

「ああ。惚れてるぜ。そう云っただろ？」

何を今更。

「いや、そうじゃなくて、俺とやりてーくらい惚れてんだろ？」
思わず、煙草に咽た。

「じょーだんキツイぜ？」

「女房がな。今度の件で首賭けるつつたら、勝手に賭けないでつて怒って出てつた」

淡々と言葉を綴る五島に、俺の方が啞然、呆然だ。

「只今、離婚調停中。ひと月も経てば、ひとりもんだ」

「早まんな！　今回は上手くいったじゃねーか。奥さんに謝って来いよ」

「いや、何時、同じことされるか判らないってさ」

五島の性格では確かにそうだ。俺は同期の中でもキツイ性格だった五島の女房の面を思い浮かべて、げんなりした。読みが正確だ。付き合いの長さは伊達じゃない。

「で、俺に貰ってくれとでも云う気か？」

「ま、こんなオヤジでよければだけどな」

馬鹿野郎。本気にするぞ。

俺は五島の口にくわえた煙草をもぎとるようにして、唇を重ねる。態と舌までねじ込んでやった。

五島の反応は鈍い、筈だ。

「寝るなよ。馬鹿野郎」

俺はアキアカネの飛び交う屋上で、煙草を燻らす。隣には惚れた男が眠ってる。

「悪くないかな」

首を賭けた代償は、意外な重さで返って来た。

<おわり>

ツンデレ【アイツと俺と夏休み！】

「誰もてめーと行くなんて云ってねーだろ！」

「いいから、いいから。ほら、こっち来いって！」

景山は強引に俺の腕を取って走り出した。

「景山くん、何処行くの？」

「皆で遊んでなー」

「えー、つまんない！」

女の子たちの不満げな声は、あつという間に遠くなった。
走る景山の足は速い。

手を引かれて走る俺の足がもつれた。

波に足元を救われる。

「わ…ッ、」

顔から海に突っ込むかと、ぎゅっと目を閉じた。

「大丈夫か？」

だが、俺の身体は景山の広い胸の上にある。

俺が転ばないように受け止めてくれたらしい。

「意外と重いんだな」

「たりめーだッ、女じゃねーんだぞ！」

俺はがばりと起き上がり、逆に景山の腕を取った。

「おら、何処へ連れてく気だ？」

俺に手を引かれるまま、景山が立ち上がる。

「俺の秘密基地」

にっこりと笑う景山に、俺はどきりと心臓が跳ね上がった。

いつも、女にちやほやされて、俺たちのことなんか小馬鹿にしている、やな野郎だと思ってたのに。

こんな顔もするんだ。

「ほら、こっちだ！」

再び、俺の手を引いて走り出す景山の顔は、小坊のガキみみたいだ。

俺も一生懸命に走る。

そのうち競争みたいになって、いつの間にか並んで走っていた。
手を繋いだまま。

着いた場所が入り江の外れ。

遊んでいた連中はとっくに見えない。

「川辺。こっちだ」

景山が俺を手招く。腰まで海に浸かったまま、どんどん進んでいくが、実のところ、俺はあんまり泳ぎが上手くない。

迷っていると、振り向いた景山が、俺に手を伸ばした。

「三城」

いきなり呼ばれた名前に、俺は思わず、景山の顔をじっと見てしまう。

優しい眼差し。引き寄せられるように、差し伸べられた手の上に、手を重ねた。

導かれるように海の中を進む。

海に浮かんでいる小さな島のような、大きな岩の向こう側へと回ると、岩はまるで椅子のような形に半分削れていた。

「へーっ、おもしれー」

「だろ？　ここ、あっち側からだと全然見えないんだぜ」

ホントに秘密基地だ。

「潮が引いたときに来て、見つけたんだ」

「ふーん」

まるで海に浮かんでるみたいだ。ばしゃばしゃと足をバタバタさせる。

なんとなく、楽しくてはしゃいだ気分。

「みき…」

名前を呼ばれて振りむくと、真剣な顔の景山がこっちを見ていた。

「夜までココにしよう。今夜の花火の特等席なんだぜ」

まるで、女の子に囁くように云われて、俺はぷいと横を向く。

赤くなつた頬を見られたくない。第一、何で赤くなつてゐるんだよ？

「別にいいけど」

まるで渋々という風に返事をした。

「三城と一緒に花火が見られるなんて、嬉しいよ」

「さつきから、三城三城って慣れなれしーっての」

優しい笑みを浮かべた景山の顔が見ていられなくて、俺はそんな憎まれ口を叩く。

「じゃ、俺のことも名前で呼べよ」

「何で俺がお前のことなんか…」

思わず振り向いた俺を、景山が引き寄せた。

女の子が騒ぐのも判る。近くで見る景山の顔は、綺麗で整っていて、それでいて、大人っぽい逞しさを滲ませている。

「みき…」

囁かれて目を閉じた。

唇が重なる。沈んでいく夕日が俺たちを照らしていた。

「基」

<おわり>

思い出（ブライダルブルー）

決して結ばれないと分かっている。だが、人は恋をするのだ。何故か。

まだ、新入社員になったばかりだというのに、高校時代の同級生から結婚式の招待状が来た。

それを受け取った俺は、行こうか行くまいかひどく迷ったことは確かだ。

何故、俺に招待状などをくれたのか判らない。

花嫁も確かにクラスメイトだったが、双方とも特別親しかった訳でもなければ、大学の学部すら別だった。

華やかなカップルは、大学でも大勢の華やかな友人に囲まれていた。高校の同級生など呼ばなくとも、列席者には事欠かない筈だ。

だが、俺は迷いいつも、そのはがきに出席の印をつけて返信した。自分の中の決着をつける為に。

そば降る小雨の中、行われた式は、厳かで静かなものだった。

花嫁は、長いベールをまとってはいたが、飾り気の無い身体にぴったりとした白いドレスは簡素なもので、花嫁も地味なスーツ姿。

ある意味、新人らしい式と云えなくは無かったが、華やかな二人には似合わないような気がする。

「誓いのキスを」

神父が厳かに告げる中、ゆっくりと二人の唇が重なった。

「池上！」

振り向いた花婿が俺に気付いて、手を上げる。幸せそうに笑うその

顔がまぶしい。

「戸越」

俺も手を上げて、微笑んだ。

花嫁が友人たちの元へと向かうのを促した戸越は、俺の元へと走り寄った。

「お前には絶対に来て欲しかったんだ」

「何故？」

絶対に、などという言葉が似合うような間柄では決して無い。俺は素直な疑問を口に上らせていた。

「お前、覚えてるか？ 俺が部活引退したときのこと」

「ああ」

それならば、覚えている。確か夏の大会の予選が終わった後だ。本選に出ることなく、戸越の夏は終わった。

誰もいなくなつた体育館をじつと中庭にたたずんで見つめていた戸越の後姿は、まだ梅雨のあけきらぬ季節の雨に濡れて、消え入りそうに見えた。

「風邪ひくぞ」

思わず、そう声を掛ける。

「池上」

「大会が終わっても、全部が終わった訳じゃないだろう？」

濡れたままの戸越は、何処か捨てられた犬のような風情だった。戸越は、部活は高校までしかやらないと云っていた。最後の大会だったのだ。負けて悔しい気持ちは解る。

だが、俺たちは受験を控えていたし、それだけが人生の目標でもないだろう。

「そうだな、池上の云う通りだ」

フルフルと大型犬が頭を振って水滴を落すような仕草をした戸越に、俺はゲラゲラと笑い声を上げてしまった。

いつも華やかで自信に溢れた戸越のそんな場面は、きっと誰も目にしたことがないだろう。

その俺を舌打ちするように見た戸越は、さっさと立ち去っていく。それが俺と戸越の唯一の邂逅だった。

「あんなこと、覚えていたんだ」

「ああ。俺、結構あのころは自棄になり掛けてた。もつとやれた筈だ、って妙な自信ももってた。だから、負けたことを認めたくなかった」

「でも、俺は」

そんなに大層なことを云った訳では無い。在り来たりすぎる言葉を掛けただけだ。

「うん。多分、池上にはそんなに意味が無いことだったんだろうと思う。でも、俺には嬉しかった。前を向かせてくれたのは池上だ」
「そうなんだ」

俺はひたすら、嬉しさを噛み締めていた。そんな風にあのことを捕らえていてくれたなんて。

「だから、俺たちの門出には、池上に祝って欲しかったんだ」

戸越が晴れやかに笑う。花嫁が手を上げて、戸越を呼んだ。

「じゃあな、また」

堂々と歩いていく背中に、あの日の戸越の後姿がダブる。あのころ、俺たちはまだ、ブレザーの制服姿だった。

ライスシャワーと、ブーケトス。

戸越たちが車に乗り込む。それを俺は教会の窓越しに眺めていた。参列者も去った教会の中は、激しくなった雨の所為もあって、寒々しい。

俺はネクタイをほどいて、それをリボンタイのように結んだ。高校のころ、こうして窓越しに戸越の後ろ姿を眺めていた頃を思い出す。

後ろから伸びてきた腕に、ふいに抱き閉められた。

「遅いから、心配した」

「何？ 花婿を強奪して、逃げてるんじゃないかと思った？」

クスクスと笑う声は我ながら、自虐的な響きだと思う。

「お前、悲しいなら泣いてもいいんだぞ」

「うん」

俺はそのまま、男の胸に顔を埋める。

いつもは強引過ぎるぐらいの腕が、柔らかに俺を抱き締めてくれた。

<おわり>

異世界トリップ【生きていく場所】（前書き）

小説家になろう「憧憬の王城」ムーンライトノベルズ「遙かなる星の軌道」の番外編です。

異世界トリップ【生きていく場所】

ぐらりと足元が揺れた気がした。

いや、揺れている。

地震だと感じた時には、既に立っていられないくらいだった。

少し離れた場所にいた筈の男の腕が、俺を包み込むように抱きこむ。

その瞬間、崩れ落ちる天井――。

俺も男を護るように、腕を伸ばした。

庇いあうように抱き合ったままの俺たちの上に、砕け散った岩盤が降り注ぐ。

最後を覚悟して、目を閉じた。

「セージ。無事か？」

開いた瞳に飛び込んできたのは、青い瞳と月の光を受けて銀色に光る長い髪。

俺の愛おしい相手だ。

「サディ、良かった……」

無事な姿にほっと息を吐く。

俺だけが生き残っていたらば、俺は多分、全てを呪っていただろう。見上げた空には、大きな月。

視界一杯に広がる、手を伸ばせば触れそうな程の大きさの月に、俺はガバリと飛び起きた。

そんな筈は無い。

俺とサディがいたのは、互いの勤め先の手掛けていたビルの地下工事の現場だ。

新都市の再開発の中心となる、デカイビルの地下は、それぞれのビ

ルを繋ぐ通路であり、ショッピングモールにもなる予定の場所だった。

だが、今、俺たちがいるのは、突然の地震で崩れた工事現場の瓦礫の中でも、ましてや助け出された病院のベッドの上でも無い。

空に掛かるのは、まだ少年の頃に数ヶ月の間だけしか見たことの無い、大きな月。

「トレク、ジエクサ？」

呆然と呟いた俺の肩を、サディが抱きしめた。夜露に濡れたものが、抱き締める腕はしっとりと湿っている。

「そうだ、セージ。トレクジエクサ、だ」

振り仰いだ先には、山をくり貫いて作られた城の明かり。

そこにあるのは、確かにトレクジエクサの山城だ。

「何故？」

その日、俺たちは、異世界へと再び迷い込んでしまったことを知った。

「誠司？」

俺の目の前にいるのは、あの頃から幾分かは年を食ったものの、とても、三十に手が届くようになった俺の父親だとは思えないだろう中年男だった。

普通ならば、初老に差し掛かっている筈の俺の親父は、いまだ中年のまま、俺の目の前にいる。

「うん。久しぶり。親父」

俺が笑うのに、親父の顔が泣き出しそうに歪んだ。

その親父の肩を、後ろにいた金髪の若い王が支える。

俺と同じ年の筈だったが、俺の人生で十数年の歳月が過ぎても、こ

ちらも青年のままだ。

やはり、ここと俺たちの世界は時間の流れが違っらしい。

朝になって、王宮を訪ねた俺たちは、すぐに賓客として迎え入れられた。

元・近衛隊長であつたサデイのことを覚えている兵士は、まだ居たし、何よりも親父がここへ来た時の年齢に近くなつた俺の顔は、尚のこと、親父に似ていたからだ。

実際に間違えて話しかけてくる者もいたくらいである。

「大きくなつたな、誠司」

「年食つた、の間違いだろ？ もう俺は二十八だぜ」

泣きそうな目で話しかけてくる親父に、俺は戸惑いを隠せなかつた。つい、ぶっきらぼうに応じてしまう。

『誠司をずっと護つていてくれたんだろ？ ありがとう、サデイユース』

親父がトレクジェクサ語で、サデイに頭を下げた。

『いえ。セージを護るのは俺がそうしたいからです』

親父に対して、そう云うサデイに、俺は胸が一杯になる。

こんなに真っ直ぐに俺だけを見てくれる相手は、きっと他にはいないだろう。

『そうか。お前が見つけたのは、俺の息子か』

『はい。セスリム・セイ』

親父の顔は、一瞬にして違う顔つきになっていた。父親としての顔ではなく、この国の王の隣に立つセスリムとしての顔。

『とりあえず、休んでいくといい。自然と時は来る』

軽く俺の肩を叩いた親父に、俺は眉を寄せた。

「お前…、何処か怪我してるだろう？」

「セージ？」

親父の言葉に反応を示したのは、俺よりもサデイが早かつた。

「腕を少し…」

天井材の欠片が当たったのだろう。妙に痛むが、耐えられない程ではない。おそらく打撲程度だろうと放っておいたのだが。

「何故、云わなかった？」

「すぐに収まる。只の打撲だ」

怖い顔をしているサディに、親父が横から薬草を渡した。

アロエのようなものを大葉に似た葉に塗りつけて、睨みつけるサディに、俺は根負けして渋々、上着を脱ぐ。

赤く腫れた上腕に、それを貼り付けると、柔らかい葉は冷たくて気持ちよかった。

「一人で耐えるのは止める」

「うん。ごめん」

俺は素直に謝る。サディの日本語は、発音出来ない音がある為、セリテンスが短い。その中にイロイロな気持ちが混じっているのだ。

—— 一人で耐えるのは止める。二人でいるのに。

そう、俺たちは二人だ。

「お前は大人になったんだな」

「親父？」

顔を上げると、親父が複雑な顔をして俺を見ている。

喜んで良いのか、悲しんで良いのか解らないと云う風に。

「久しぶりの異邦人は、元々の同胞とは」

『ドラテア様』

突然、割って入った声に振り返ると、そこにいたのは星術師と呼ばれる女だ。床まで届きそうな長い銀髪の、何もかも見透かすような薄青い瞳をしたロングドレスの女。

『いい顔になったな。変えたいと願ったか？』

『ドラテア様……』

一瞬、はっとしたような顔をしたサディが、大きくうなずいた。星占と呼ばれるそれを、俺は信じてはいない。だが、それはサディを始めとするこの国の人々には大きなものだろう。俺が口を挟めることでは無い。

『縛られることは無い。願うのなら、戦えばいい』

『はい』

会話の内容は俺にはまったく解らない。だが、その結果が今、俺の隣にいてくれることだとすれば、後はどうでも良かった。

休んでいろと親父は云ったが、中々二人だけでゆっくりすると云うわけにはいかなかった。

何故ならば、サディが帰ったことを知った、昔の同僚や、親戚などがひっきりなしに訪ねて来たからだ。

最後には、面倒になったらしく、サディは大人しく街へと連れ出されていった。

手持ち無沙汰になった俺は、ごろりとベッドへと横になる。打撲で軽く熱のあった身体は、すぐに眠りへ誘われた。

ざわめきが俺を眠りの縁から呼び覚ました。

それは明らかに悪意を運んできている。

ガバリと俺は身を起こし、窓を開けた。

『街で近衛が防戦しています！』

『レダと弓を！』

城の前の広場で叫んでいる中には、親父もいる。

『突破されたら、そのままここへ誘い込め！』

親父の手には、弓もどきのもつと立派になった奴があった。

街を見れば、大勢の人がうごめいている気配はするが、俺には何が起こっているのかはまったくの謎だ。

「親父！」

「誠司！ 窓を閉めて引っ込んでいろ！ ちょっとした小競り合いだ」

そついう親父の顔は、結構獰猛な感じで、とても小競り合いを片付

けると云う風には見えない。アデイル王はとっくに出て行った後だろう。

俺は窓を締め、走り出した。

サディは、街へ近衛の連中と出て行ったのだ。アイツの性格で、途中で帰ってくるなんて云うのは有り得ない。

サディも戦っているのだ。

「親父！俺にも弓をくれ！」

「誠司！」

走り出てきた俺に、親父が一瞬だけびくりした顔をしたが、すぐに諦めたような顔つきになった。

そうそう、アンタの息子だぜ、俺は。本来護られるべき立場にあつても、大人しくなんかしていない、アンタの。大の男になった俺が、大人しく引ッ込んでいる訳が無い。

「馬は乗れるか？」

「いや、やったこと無い」

突然、親父がトレクジエクサ語で俺に話しかけた。すぐに、周囲の兵士たちにも聞かせる為だと気付く。

「俺のレダの後ろに乗れ。弓は？」

「これでも県大会じゃトップだぜ」

「じゃ、任せた。振り落とされるなよ」

「OK！」

親父がレダと呼ばれる、馬代わりの大型の鹿に跨った。俺も慌てて、その後ろへと飛び乗る。

「誘い込みは止めだ！打って出るぞ！」

親父が周囲へと指示を飛ばすと、レダを走らせた。その後に、兵士たちが続く。

後ろから大柄な茶髪の男が走り出てくるのが見えた。

「セスリム！」

と叫んでいたところを見ると、親父を止めに出てきたのだろう。

「チッ、後でレドウィルにまた大目玉だ。お前の所為だぞ」

馬を走らせながら、親父が呟く。

「だったら、大人しく防戦の準備してれば良かっただろう」

「お前にばかりいい格好させるか。息子の前で格好付けないで、どうする」

拗ねたような親父の言い草に、俺は思わず笑ってしまった。

「小競り合いってのはよくあるのか？」

「隣の国が、ちょっかい出したがっている。もちろん、自国の団を動かす訳にはいかんから、強盗団やら、山賊やらを雇っているんだ」なるほど。

「舐めた真似するとどうなるか、思い知らせる。遠慮はするな」

親父の顔が、厳しいものになる。

『見えたぞ！』

親父が呟くのと、騎乗した兵士が剣を抜くのは同時だった。

背を低くして、親父が俺に敵の姿を見せる。

俺は矢をつがえた。

サディの後ろから、刀を振りかざした男を射抜く。

正直、レダの揺れで焦点が定まらない。サディに刀を抜いた時点で喉元を狙ったつもりだったのが、外れて肩先を掠める。それでも威力はかなりある筈だ。

『セージ！』

『サディユース！』

「降りろ！」

親父の声に、走っているレダから飛び降りる。受身を取るつもりが、サディに受け止められた。

その俺たちに襲い掛かった賊を、親父の矢が射抜く。

足だけで器用にレダを操りながら、次々に矢を放つ。そして、剣を構えた金色の獅子王の隣にレダを寄せた。

王の隣へ並んだ親父は、これが俺の父親かと疑ってしまうくらいに神々しい。

血だらけの刀を構えた金髪金瞳の王と、厳しい瞳で弓を構える小柄

な男。その身体は、ひどく大きく見えた。
俺とサディも背中を預けあったまま、それぞれに剣と弓を構える。
賊が一瞬飲まれたように、一歩退いた。

あっけなく戦いは終わった。

賊は新手が来たと知ると、すぐに退く。

王も親父も、言葉少なに部屋へと戻っていった。

「セージ、無茶はするな。俺の心臓止める気か」

部屋へ戻るなりに、サディが俺へ訴える。だが、お前だけを戦わせたら、俺はきつと後悔する。

「俺は、男だ」

「ああ。そうだな」

サディが呆れたように呟くが、その瞳には子供を見守る親の様な慈愛があった。

俺はその男を引き寄せる。抱き込もうとして、腕に痛みが走った。

「痛むのか？ セージ」

「まあ、少しな」

仕方が無い。諦めるしかないか。

大人しく寝ようと、ベッドへと横たわると、俺の上にサディが乗ってきた。

「寝てればいい。今日は俺がやってやるから」

今じゃ、俺の親父より上になっただろう男なのに、サディは未だに慣れない反応を示す。

台詞は積極的だが、耳まで真っ赤に染まっていた。

「じゃ、頑張ってもらおうかな？」

こんな機会を逃すほど、俺も馬鹿じゃ無い。俺は身体のを抜いて、サディの好きにさせた。

起きたときには、何処にいるのか判らなかった。

大きな天井材が、俺とサデイの上にあるが、うまく重なり合って空間を作っている。

俺たちはお互いを庇いあうように、しっかりと抱き合ったまま、そこでうずくまっていたのだ。

「サデイ、無事か？」

「ああ」

頭を振って、サデイが目を開く。離れるだけの空間は無く、俺たちは抱き合ったままだ。

一瞬、夢だったのかと思っただが、腕の痛みは引いていた。

「おい、安芸くん、佐渡ちゃん」

「佐渡ちゃん、何処にいるんだ？」

「サド、返事しろ！」

「安芸さん、大丈夫ですか？」

大勢の声がある。どうやら、ここでは一晩しかたっていないらしい。行方不明の俺たちを探しているんだろう。

もし、あそこでトレクジエクサへ飛ばされていなければ、確かに瓦礫の下敷きだったかもしれない。

「大丈夫です！ ココにいます！ サデイも一緒です！」

俺は大声でその声に応えた。

ここが俺たちの場所。王の隣が親父の場所であるように。

> おわり <

季節もの【トリックオアトリート】1（前書き）

季節モノ、ハロウィンネタです。

季節もの【トリックオアトリート】1

日本でも、最近はすっかりハロウィンという祭りが定番となった感がある。

町ぐるみで、イベントが行われるのも珍しいことではない。それはこのターミナル駅近くの商店街でも同様だ。

「おい、有働。お前、駅前でチラシ配って来い」

先輩社員に手渡されたチラシには、『ハロウィンイベント！ 出玉増量！』と何とも情緒の無い文字が並んでいた。

駅前に位置するパチンコ屋に勤める有働には、週に何度かこの仕事が行き交う。

店のキャラクターの女の子が魔女の格好をしたイラストのついたチラシを、駅前で通りすがりの人に手渡す。一応は大人だと思える人に渡すのだが、間違えて学生なんぞに渡してしまうと、途端に駅前の交番で指導を食らう羽目になってしまう。

故に、この作業はもつとも社員はやりたがらないものの一つだ。

上手い客あしらいも、手早い作業も出来ない有働は、要領よく断ることも出来ずに、どうしても廻されてしまう。

もつとも、交番の警官も、幾度も同じ失敗を繰り返す有働を、すっかり覚えていてお目こぼしをしてくれるのだから、この配置はあながち間違いとも云えなかったが。

「ウド。お前、またチラシ配りかよ？」

そんな有働に声を掛けてきたのは、小柄ではあるものの、スレンダーで鍛えられたボディを青灰色の作業服に包んだ有働の高校時代の部活のOBである。

「春香さん」

タバコを啜えたままの唇を歪ませ、ニヤリと春香が笑った。
仕草は多少オヤジくさいが、そこらの女の子よりもずっと可愛らしい顔をした春香に、有働は思わず見とれてしまう。

「ほら、寄越せ」

そんな有働に、春香はチラシを寄越せと手を差し出した。チラシはそのままクーポン券になっている。数枚を手に取り、自分と同じ作業服の集団に手渡した。

「やれやれ、ハルちゃんは、ウドちゃんの店でしか打たせてくれないんだよなあ」

「そうそう、こんなモン受けとったら、マイスターしか行けないじゃん」

ウドの勤めるパチンコ屋はマイスターホールと云う名だ。

「あ、す、すみませ…」

「どーせ行くくせに、文句たれんじゃねーよ」

頭を下げようとする有働の頭を、ヘッドロックの要領でがつんと捕み、春香は文句を並べる同僚に、蹴りを入れる真似をする。

「は、春香さん、くるし…」

苦しいなどと文句を並べたものの、実のところ有働の心の内はもつと複雑だ。赤くなる頬を押さえるのも限界がある。

有働と春香はつい先日、恋人同士になったばかりである。

春香と付き合う前には、まったく恋愛経験皆無の有働にとって、春香とこんな風に接触するのは、口から心臓が飛び出そうな感じでさえあるのだ。

外でのそういう接触はさけて欲しい。

「おいおい、大丈夫か？ ウドちゃん」

案の丈、真っ赤になった有働を心配したらしい作業服の一人が覗き込んでくるのに、有働はフルフルと首を振るしか出来なかった。

「適当なところで戻って来いよ」

春香は有働に声を掛けると、同僚たちを率いて歩き出す。チラシがはけなければ、何時までも店に戻って来ない有働を心配しての言葉だと判って、有働は改めて頬を染めてしまった。客観的に見ると、二メートル近い長身の男が、頬を染めているなど、キモイ光景に他ならないが、春香はそれを目にして、意地悪く微笑んだ。

ああいう素直すぎる反応が可愛いのだ。

「トリックオアトリート！」

いきなり掛けられた声に、隣を振り向くと、二次成長期前だろう女の子が、にっこりと笑って期待に満ちた顔をしている。

周囲を見渡すと、仮装をした集団が商店街に消えていくのが見えた。

「ああ。ハロウィンか」

最近イベント事にかこつけての商店街の行事が増えたが、今日は仮装コンテストらしい。

そういえば、さっき有働が配っていたチラシにも、そんなことが書いてあった。

同僚のオヤジ連中は、孫や子供がいる所為か、女の子たちにポケットに入っていたチョコなどを渡している。

だが、甘党でもなければ、子供もない若い春香には、持ち合わせがなかった。

『トリックオアトリート』

本来の意味では『いたずらとおもてなしどっちにする?』と云う意味である。いたずらされたくないから、とお菓子を与える訳だ。

「トリック」

ほんの悪戯心でそっちを選んだ春香に、目の前の女の子が目丸くして、頬にチュッとキスをしてくれる。

どうやら、そういうルールになっているらしいかった。

可愛い子だし、春香も悪い気分では無い。女の子も笑って手を振り、商店街の中へと消えていった。

「は、春香さん、待って…」

ベッドへと組み敷いた恋人が恥ずかしがって暴れるのは、もはや定番と云つてもいい。

だが、今日はとことん強硬だった。

腕を突っ張って、春香の胸を押しつける。

「ウド？」

「おれ、帰ります」

突然の言葉に、春香が呆然となった。

「冗談じゃねーぞ。お前、俺の云うことが聞けないってのかよ」

体育会において、先輩の命令は絶対で、OBは神さまである。その部活でのしつけが行き届いた有働は、春香に逆らったことなどまったく無い。しかも、春香自身に惚れ込んでいるのは、傍目に見ても明らかだった。

実際、春香より二十センチ以上も上背の勝った有働が本気で逆らえば、酔った隙を付いた最初の時はともかく、二度目は無かった筈だ。「だって、春香さんは…」

泣きそうな顔で見上げる有働は、春香にとっては何よりも可愛い。このまま家に帰すなど、とんでもない話だ。

「俺はお前がいいんだって云ってるだろ？ 一体、どうしたんだ？」優しく頭を抱き寄せると、有働はそのまま春香の肩にコトンと頭を乗せ掛ける。

「女の子とキスしてたでしょ？」

どうやら、有働は『トリックオアトリート』を見ていたらしい。

「お前とはもつとすごいこと、いっぱいしてるだろうが」

「でも…」

可愛い春香と、可愛い女の子がキスしているのは、何より

も絵になっていた。

有働と並ぶよりも、ずっと違和感が無い。

「トリックオアトリート？」

泣きそうになる有働の通った男らしい鼻梁に、春香はキスを送った。

「なに？」

「ハロウィンくらい知ってるだろ？」

震えるまぶたにもキスを降らせる。

「お菓子なんて、持ってますん」

「だったら、大人しく俺に悪戯されてろ」

別の意味で泣きそうな有働を、春香は改めて抱き寄せた。

「トリックオアトリート？」

もう一度聞く。

掠れた声が紡ぐ言葉は一つだけだ。

「トリックオアトリート？」

「トリック」

<おわり>

季節モノ【トリックオアトリート】2

「トリックオアトリート！」

古い日本家屋のドアを開けると、ガキどもが期待に目を輝かせて立っていた。

「は？」

俺はドアを押さえたままの姿勢で固まる。

ここの住人は、現在仕事の後の汗を流している最中だ。

「佐伯、すまん。冷蔵庫にクッキーが入ってる」

どうやら、俺の戸惑いは、しっかりと玄關脇に位置するシャワールームの中まで聞こえたらしい。それとも聞こえたのは、ガキどものデカイ声の方か。

冷蔵庫を開けると、珍しく俺の買って来た以外の食べ物が、綺麗にラッピングされて並んでいた。

こんな光景は、俺がこの家に入入りするようになって数年。初めてお目にかかる。

ラッピングの中身は、コンビニなどで目にするような、クッキーの詰め合わせセットだ。

「ひとり、一個だぞ。食べ過ぎんなよ。暗いんだから、早く家に帰れ」

シャワールームのドアを半分だけ開けて、久世が顔を出した。

童顔系の顔だが、逞しく鍛えられた筋肉質の身体が厳つい印象をかもし出している。

数年前によく手に入れた恋人だ。

びしょびしょになった短い髪をかき上げながら、そう子供たちに云い付ける。

「はぁい」

「うん、先生！」

口々に子供たちが元気のいい答えが返ったが、その中で一人だけ、返事をしない子がいるのが俺の興味をそそった。

だが、久世を嫌っている風ではない。むしろ、一番久世が顔を出したときに、顔を輝かせた女の子だ。

先生と呼ぶからには、久世の通う柔道場で、久世に教わっている子供たちに違いないが、ごついタイプである久世が、こんなに子供に懐かれているとは信じ難い。

「ねー、隆大センセ。この人が隆大センセの恋人？」

一番、目を輝かせていた子が、そう切り出して、俺のクッキーを渡していた手が、ぴたりと止まった。

「ああ、歩美。そうだ。俺は、嘘は吐いてないだろう？」

簡単にうなずいた久世に、俺の方が慌てた。普段、そういうことを簡単に云ってくれる男ではない。

「ホントだ。綺麗な人だねー」

「歩美の彼氏よりカッコいいだろう？」

ふふんと鼻をならして自慢をする姿など、誰が想像しただろう。俺は天にも昇る心地だった。

久世は、親しい人間には意図的な嘘は吐かない方だ。俺たちの関係もバレたらバレたときだと開き直っている感がある。

「えー、うっそだー。こんなにカッコいい人が、先生の彼氏の訳無いよー」

「お前ら、俺に対する評価が低いぞ」

子供たちと本気で云い合いを繰り返す久世は、今にもシャワールームから出てきそうだった。

例え、子供相手だろうが、久世の身体なんぞ見せたい訳が無い。

俺は、全員にさっさとクッキーを配ると、シャワールームから上半身を出した久世にバスタオルを渡すと、ドアをぴたりと閉じた。

「上がるなら、ちゃんと拭いて、服着て出て来い」

背中ドアを押さえた俺は、改めてガキどもに向き直る。

「俺が久世の恋人だ。何か文句でもあるか？」

ドスを効かせてガキどもを睥睨した。

腕組みをして、玄関先で子供相手に睨みを利かせる姿は、情け無いのひと言に尽きるのだが、それでも久世が彼氏だと云ってくれた機会を逃す気は無い。

「オジサン、大人げないって云われない？」

歩美と呼ばれた子供が、大人びた仕草で首を傾げる。

「お前の可愛げの無さには負けるがな」

「子供相手に威張るな。お前は」

ガチャリとシャワールームのドアが開き、出てきた久世に後頭部を殴られた。

「ほらほら、もう好奇心は満ちただろう。早く帰れよ。お家の人が心配する」

「え」

口々に抗議をいれるガキどもを、久世はうまくいなして、さっさとドアを閉める。

ぞろぞろと帰っていく気配が、普段は静かな路地裏に響いた。

「女の子はあの年でもマセてるからな。『先生のカレシ、歩美の力レよりカツコいい？』だと」

「なるほどね」

それを確かめに来た訳か。

「今年は、駅前の学習塾でハロウィンをやってて、参加する家を募っていたからな。あそこは、ほとんどの道場の子達が通っているんだ」

「ああ。それで」

ということは、来年も再来年もこの日はこの状態だったことだ。

「で、お前、何て答えたワケ？」

あの子は『ホントに綺麗』って云ってたぞ？

「カッコいいって云うより、綺麗だなんて」

云った途端に、久世の顔が真っ赤に染まった。

俺は男の常で、この綺麗と称される顔が嫌いだったのだが、久世に云われる綺麗は嫌いじゃない。

現金なことだな。

「なあ。いいか？」

半ば、押し倒しかけた体制で問う。

開きかける口を、自分の口で塞いだ。

そのまま、口腔をじっくりと味わっていると、久世が首を振って俺から逃れる。

「ちょ、待って…」

「男がこうなったら止まらないのは、お前だって承知だろう？」

そのまんま、玄関で攻防を繰り返していると、ドアホンが間抜けな音を立てた。

「トリックオアトリート！」

さつきとは違うガキどもの声が、商店街の路地裏に響く。

「もしかして、他にもいるのか？」

「当たり前だ。近所のガキどもが全員参加だぞ」

そう云えば、冷蔵庫には山のようなクッキーがあった。あれで終わるな筈は無かったのだ。

俺はため息を吐いて、久世の上から渋々退いた。

「トリックオアトリート！」

声を揃えて、外のガキが叫ぶのが聞こえる。

あられもない姿でドアへ向かう恋人を襖の向こうへと追いやり、俺はドアへと向かった。

どうやら、今日はこれが片付かなければ、何もさせてはもらえないだろう。

ちよつとだけ、御近所付き合いの理不尽さを呪いながら、俺はクツキ―を片手にドアを開いた。

<おわり>

漢受け【武士の背中】<番外>（前書き）

ムーンライトノベルズ掲載「武士の背中」の番外です。

元・大店の旦那と店の用心棒であった男の、その後の話です。

漢受け【武士の背中】<番外>

幾度か打ちかかる木刀を、すべてするりと交わされる。

大柄な身体は、その見た目に反して、非常にしなやかだ。

手元に打ち込まれ、思わず木刀を取り落とした。振り下ろされた木刀はぎりぎりのところでぴたりと止まる。

「まいり、ました」

声が自然と震えた。

ずっと木刀を引かれて、安堵の息を吐く。

「これまで！」

老道場主の声が響いて、その日の稽古は終了した。

皆がざわざわと井戸端に寄る。

古い道場は、風呂があるような造りでは、当然ない。

稽古の汗を流すのは、井戸の水で身体を拭くのが精々だ。

台所で沸かした湯を使わせてもらえるのは、老道場主と最近雇われた師範代の男だけだ。

「しかし、お主も懲りんな」

「師範代になど勝てる訳がなかつ」

身体を拭いている門弟たちが、師範代の男と手合わせをしていた相手を口々に揶揄する。

だが、男は反抗的な目付きで口を引き結んだ。

そっという表情が、男の態度を不遜に見せているのだが、男は気付かず、却って他のものの志の低さを憂えた。

男・苅野匡元には野望がある。その為にも、こんな場末の道場でくすぶっている訳にはいかないのだ。元々、この道場に来たのも、この道場主が古谷野道場の師範の師匠だと聞き及んだからだ。

古谷野道場は、武家の中でも、將軍お目見え以上の者たちが通う、

由緒ある道場だ。伝も無い貧乏御家人の苅野が、おいそれと通えるような場所ではない。

ここで強くなれば、古谷野の道場へ推挙してもらえるかもしれない。御家人でも、下層に位置する苅野が、剣をもつて栄達するには、どんな小さな可能性にもすがりたいのは人情と云うものだろう。

「もし、道場主さまにお会いしたいのですが？」

呼びかけに門弟たちが振り向く。そこにいるのは、多少、年を行っているものの、綺麗な男だった。たおやかともいうのだろうか、まるで人気女形のような風情だ。

「先生ならば、奥だ」

「出入りの商人なら、勝手口へ廻るがいい。ほら、そこだ」

「ありがとうございます」

指を指す男たちに、品良く腰を折った商人は、意外としっかりとした足捌きで勝手口へと向かう。

その時、道場の奥から、顔を出したらしい道場主が声を上げた。

「伊衛門どの。どうなされた？」

「日本橋より、どじょうが届きまして。葉山先生がお好きだと伺いましたので、お持ちしました」

どうやら、老道場主と商人の男は旧知の間柄らしい。

「これは、お氣遣いかたじけない。今宵はよい夕餉になりそうだ」

「それはようございました」

「陣三郎ならば、すぐに参る。茶でも入れさせる故、あがつて行くがよろしかろう」

「いえ、そのようなお手間を掛けさせる訳には参りません。すぐに失礼します」

陣三郎と云うのが、新しい師範代の名だ。この男は、師範代とも知り合いかと、苅野はつい聞き耳を立ててしまった。

「そう云わず、古谷野道場での話など、聞かせてくれぬか？ お主

はかなりの手練だったそうではないか」

「昔の話でございます」

古谷野道場の話と聞いて、苅野はますます立ち去りがたい。とつくに拭き終わっている身体を、ひたすらこすり続ける。

「ますます、聞きたくなるの。それが無理ならば、陣三郎との馴れ初めでも構わんぞ」

声を上げて笑う葉山に、伊衛門と呼ばれた商人が苦笑いを浮かべた。
「それは、陣三郎が嫌がりましょう。平に御容赦くださいませ」
頭を下げる伊衛門を、葉山が笑い飛ばす。

「話が嫌ならば、立ち合っていてはどうだ？ それもいなか？」
「もう、身体が動きませぬ。陣三郎や、先生をお相手になど、とんでもない」

立会いと聞いて、もう我慢がなくなつたのは、苅野だ。

「せ、先生！ 私を立ち合わせてください！」

思わず、声がうわずる。古谷野の道場の手練だったというのならば、ぜひ立ち会ってみたい。

井戸端に僅かに残っていた門弟たちが眉をひそめた。

古谷野道場の門弟であつたらしい男は、どう見ても今現在は商人として暮らしているのだろう。

お目見え以上とは云つても、やはり次男三男の冷や飯食いに、身を立てる術は限られている。凝った着物からも、裕福な家のものであることを伺わせる伊衛門は、どう見ても、武士としての資質には欠けるようにしか見受けられぬ。しかも、話から察するに、師範代の念友であるらしい。

そんな男と立ち合いたいなどと、功を焦るあまりの浅ましい行為にしか見えない。

「ぜひ、私を！」

だが、少なくとも苅野は本気であつた。おそらくは、門弟たちの誰も気付いていないだろうが、伊衛門には隙が無い。たおやかそうな外見に、苅野だけは騙されていない自信があつた。

「苅野の熱心さに免じて、立ち合つてはくれぬか」

そこへ帰り仕度を終えた陣三郎が顔を出す。

「伊衛門。何が？」

場の妙な雰囲気を感じて、陣三郎が口ごもった。それを見やった伊衛門の目が剣呑な色を浮かべるのを、葉山は見逃さなかった。

「無様な真似になりましようが、それでもよろしければ」
してやつたりと両の手を合わせる。

「何、構わんよ。座興だと思つてくれれば良い」

からからと笑った葉山が、道場へ戻り、どつかとあぐらを掻く。

居合わせた門弟たちも、それに習った。陣三郎は訳が判らぬまま、葉山の隣へと腰を下ろす。

目の前で木刀を手にした苅野が座して、相手を待つ体勢となるのを目にして、陣三郎は葉山の上機嫌の訳を知った。

伊衛門が道場の家人へと、どじょうの入った手桶を渡し、道場へと足を踏み入れる。

ついと白い手が差し出された。

「陣三郎。お主の木刀、貸してもらおう」

普段のたおやかさをかなぐり捨てた男の声は、聞でしか耳にすることは無い。

ぞくりと背中が粟立った。

「はじめ！」

葉山の張りのある声に、苅野と伊衛門が同時にすつと立ち上がる。

双方とも睨みあったまま、動こうとはしない。

隙の無い伊衛門の構えに、門弟たちが目を見張った。

これは、ぜひにと立ち合いを願った苅野の気持ちも解る。

かなりの手練と云う話も、大げさなものでは無いらしい。いつしか、道場の中は、緊張感に満ちていた。

ついで伊衛門が踏み出した。

軽く木刀を合わせたかと思うと、上段から連続で打ち込む。その斬激はするどく、押されながらも、苅野は耐えてしのいでいた。

耐えながら、僅かな隙を探す。

上背は苅野の方が勝る。上からの斬激は威力があるが、それも限度があるだろう。

何より、体力が持たない筈だ。若い苅野は、まだ、自分には余力が残せると踏んでいた。

耐えて隙を待つ苅野に、鋭く重い打ち込みが振り下ろされる。

いい加減、焦れ始めたころ、さすがに疲れたのか、ふっと打ち込みが止んだ。

苅野がすかさず、上段から打ち込む。

次の瞬間、苅野の胸元に、重い突きが来た。

たたらを踏んで、踏みとどまるのが精一杯だ。一瞬、息が止まり、思わず咳き込んだ。

「ま、いり、ました」

苦しい息の下から、苅野が告げる。

「見事だ。のう、陣三郎」

「はい。相変わらず、見事な手際でございます、兄上」

控えた伊衛門に、葉山が手放しの褒め言葉を送る。それに同意した陣三郎は、二人で道場へと通っていた頃を思い出し、つい「兄上」と口に出していた。

「いえ、お目汚しでございました。やはり、思うようには動きませぬ」

頭を下げた姿は、未だ武家の所作だが、口調は柔らかいものに戻っている。それに気づいた陣三郎が、思わず口元を抑えたが、口から出た言葉は戻らない。

「よろしければ、これにて失礼を」

「すまぬ、爺の道楽につき合わせたの」

すっかりと町人のそれに戻った伊衛門が、深く頭を下げた。門弟にも腰を低く、挨拶を交わして出て行く。その後を、陣三郎が大腿で

追った。

「陣三郎」

呼びかける声は、男の其れだ。

「伊、衛門……」

常ならば、柔らかな態度で、陣三郎に否やを云わせぬ伊衛門が、今日はどうしたわけか男言葉と、強引な手管で陣三郎を翻弄していた。それは、まだ伊衛門が隣家の裕福な武家であつた頃を思い起こさせ、陣三郎を混乱させる。

只でさえ、立ち合いの姿に『兄上』と呼びかけてしまった、己が迂闊を悔いているのだ。

伊衛門と、念兄の契りを結んだのは、遙か昔。まだ、伊衛門が武家の子息であつた頃だ。月日が経ち、既に伊衛門は武家では無く、再会した折の、大店の旦那でもない。小間物屋を営む己の連れあいだ。

「兄上、と呼んではくれぬのか」

「呼ばぬ！」

からかうような物言いに、陣三郎はかぶりを振った。

「強情なことだ。だが、何時までもつか」

徐々に激しさを増していく手管に、噛み締めていた唇から、殺しきれない喘ぎが漏れる。

「声を上げてくださいませ」

耳に囁かれた、いつも通りの柔らかな商売人の口調は、ますます陣三郎を混乱させた。

「は、……ああ、……ッ」

漏れ出る声を抑えることなど出来ない。

「私の可愛いお方。離しませぬよ、もう」

「いえ、もん」

己が名を呼んだ陣三郎を掻き抱き、唇を重ねた。庭からは強い花の果が香る。

陣三郎と通っていた道場の庭にも同じ香が香っていた。
再会して、幾度目の春が巡ってきたのだろうか。それを思いながら、
伊衛門は陣三郎を抱く手に力を込めた。

> おわり <

義兄弟「ジブシーカード」＜1＞

「一実」

自分と呼ぶその声は、良く見知ったものであったが、遊佐一実はその声の主から逃げ出したい衝動に耐える。

必死に表情を押し殺して、振り向いた。

夕暮れのオフィス街に、ひどく不似合いな制服姿の少年がそこにはいる筈だ。

「やあ、文弥。どうしたんだい？」

確信のあった一実は、もう少年と青年の狭間にいる『弟』の顔を見ずに、機械的に挨拶を口にする。

それを微妙に感じ取ったのか、もしくは言葉の選び方を間違えたのか、文弥の表情が歪んだ。

「どうかしなきゃ、声も掛けちゃいけないのかよ」

「そうじゃないが……」

しまった。怒らせてしまったとは思ったが、いかんせん上手い言い訳が見つからずに口ごもる。

「大体、この間から変だぜ。何、俺のこと避けてんだよ」

「別に避けてなんか――」

自分でも白々しいと解っているからこそ、一実は自己嫌悪を禁じえなかった。

「じゃあ、何で俺の目を見て話さないんだよ！ そんなの卑怯者のやることだつて、一実が俺に教えたんじゃないか！」

背広姿の一実に掴みかからんばかりにして詰め寄る文弥は、もう一実より少しだけ背が高い。その成長に、出会ってからの年月を思う。だが、いくら詰め寄せられたところで、そのまっすぐな瞳を裏切るようなことはしたくなかった。

わざと深いため息を吐く。

「疲れてるんだ、文弥。大事な話じゃなければ後にしてくれないか

？」

本当に疲れきつた一実の口調に、文弥ははっと身体を引いた。

「悪い、一実。俺——」

自分の感情ばかりが先にたち、一実がここのところ忙しそうにしていたのに思い至らなかつた己のうかつさを責めているらしい文弥に、そんなつもりでは無かつた一実は、しまったと臍を噛んだ。

「すまない。ここのところ忙しいのは別に文弥の所為じゃ無いのにな」

確かに残業が多いのは事実だが、それは多分に一実が望んでの結果でもあつた。

「でも、一緒に住んでるのに、気付かない俺も悪いんだ」

「文弥」

がくりとうなだれて唇を噛み締める文弥を、一実はぎゅっと抱きしめて子供のように頭を撫でたい衝動を抑えきれない。

「おい、遊佐。何やってんだ？ 休憩終わったのか？ 課長が呼んでるぞ」

衝動のままに伸ばした手は、突然後ろから掛かつた声に我に歸つたように引かれた。

「あ、ああ。すぐ戻る」

同僚らしい男に返事をする一実に、文弥は自分が義兄の仕事を邪魔してしまつたらしいことを悟る。

「ごめん。一実……」

相手のことさえ考えられないくらい子供な自分が、文弥は消えてしまいたいくらいに恥ずかしかつた。

そんな文弥の様子に、一実はまたしても甘やかしてしまいたくなる。「いや、ちようど外の空気を吸いに出てきたんだ。文弥の顔を見て元気が出たよ」

につこりと微笑んだ一実は、文也のイマドキの高校生には珍しい脱

色されていない黒髪へ手を伸ばす。

だが、その手はいつまでたっても、いつものように文弥の柔らかな髪を掻き回すことは無かった。

「一実？」

「気をつけて帰るんだよ。今日も遅くなると思うから」

くるりと背を向けて、会社へ向かう一実を、文弥は見送るしかない。一方、文弥に背を向けた一実は、ほっと息を吐いた。この数年の間に、幾度も隠し通した表情を隠しおおせた安堵に。

「遊佐」

オフィスのあるフロアに上がると、先ほど声を掛けてきた同僚が、再び一実を呼び止める。

「何だ？ 梁川」

仏頂面のまま、一実が顔を上げた。さっき見た弟らしい少年の前で見ていた優しい微笑はどこへやら。そこにいたのはいつも通りの厳しい顔だ。

「あれ、お前の弟なんだろう？ 兄貴を呼び捨てか？」

同僚として過ごして5年以上になるが、梁川は遊佐一実のあんな表情を見たのは初めてで、押さえられない好奇心を刺激された。

それに、うんざりとした風を隠そうともせずに、一実が口を開く。

この男に対するごまかしは、余計な好奇心を増すだけだ。

「『文弥』は、両親が事故死した後に引き取っただけで、血は繋がって無いからな。懷いてもらう為に名前で呼び合っていたのが癖になってるだけだ」

課長が呼んでいると云う部屋へと足早に向かいながら、簡潔明瞭に一実は告げる。

「もうひとつ。いいか？」

課長室への扉に掛けた一実の手が梁川に押さえられる。

「何だ？」

「お前、あの子。好きなのか？」

好き———どういう意味で？

瞳で問い返しはしたが、一実の口について出たのは、はっきりとした肯定だ。

「当たり前じゃないか」

その笑顔の鮮やかさに、梁川は毒気を抜かれて、その場に立ち尽くした。

「見合い———ですか？」

「そうだよ。してみる気はないかね？」

堀田課長は卵で磨いたようなハゲ頭を揺らして、一実の顔を覗きこむ。面と向かって不快感を顕わにする訳にもいかず、一実は内心当惑するばかりだ。

「宮崎常務のお嬢さんなんだ。Ｔ大を出たばかりの才媛だそうだよ。しかも、かなりの美人らしい。君とならお似合いだと思うのだが」
宮崎常務に取り入る手段として部下を使おうというのだから、課長もたいしたものだ。と立石に水の状態でしゃべり続ける上司を、覚めた目で眺めやる。

一実は宮崎のいかにもやり手らしい隙の無い目つきを思い出して、ぞっとした。あの男の娘じゃ、いくら美人でもしれたものだ。かといってあからさまに断るには角が立ちすぎる。

「どうかね？」

期待に満ちた堀田の視線を受け止めながら、こっそりと一実はため息を吐いた。

義兄弟「ジブシーカード」＜2＞

「ただいま」

返事が無いのを承知の上で、一実は奥に向けて声を掛ける。いくらなんでも、もう文弥は夢の中だろう。

背広を脱いでキッチンに入ると、夕飯の支度が出来ている。

一日中顔を合わせない日が続くようになってから、それは文弥の代わりに一実の帰宅を出迎えるようになった。

何事にもおおざっぱな文弥らしいある意味「男の料理」だが、何よりも心がこもっている。

だが、それでさえ罪悪感を抱えた一実には、文弥の無言の抗議のようで箸が付けられない。

時刻は既に真夜中と云って差し支えない時刻だ。

ネクタイを緩めた一実は、疲れきった身体を居間のソファに横たえた。食事をする気は既に無い。

「見合いか……」

天井を見つめてポツリと呟く。

今日のところは断りをいれてあるが、それで何時まで逃げを打てるかは謎だ。現在の会社にいる限り、いつかは受けなければいけない話かもしれない。

だが、受ける訳にはいかないのは、多分に文弥の存在が大きかった。血の繋がらない『弟』は既に18だ。いつまでも保護者のいる年齢では無い。自分が結婚したあと、その相手が文弥をちゃんと扱ってくれる可能性は薄いだろう。何より、文弥を自分の下から離したくは無かった。

梁川への答はずばり本音だ。

成就する筈の無い思い——だが、それでも兄としてでもいいから文弥の慕ってくれる自分でありたかった。

一実の手が無意識にポケットを探る。

指先に触れたのは一組のカードだ。占い師だった伯母が自分に残した唯一の形見。

精神安定剤代わりに持ち歩いてしまつのは、昔から不安を抱えたときの癖だ。

伯母から教わった簡単なカードマジックと占いは、小さな文弥を慰めるのに役立つてくれた。

あれは、いつのころだったのだろう。

起き上がって、パラリとカードをめくる。手に馴染んだカードはシヤッフルもだんだんと早くなつていく。そのうち、空を舞う様だったカードはぴたりと一実の手の内に収まった。すつと扇状にテーブルに置く。

幾枚か選んで裏返しのまま、一列に並べた。

左端から表へ返す。次いで、右。

原因、経過、時、そして――

「一実、まだ起きてたのか」

結果のカードをめくろうとした、一実の動きがぴたりと止まる。

「文弥？」

突然、玄関の方から聞こえた声に、一実は驚きも顕わに振り向いた。

「お前、何で――」

時刻はそろそろ一時になろうかというのに、居間に現れた文弥はジーンズにＴシャツ姿で、いま、外から帰って来たばかりだと云うのが丸判りだ。

「こんな夜中に何処行つてた？」

途端に、一実の口調が詰問調になる。

いくら男でも、昨今は安心できない世の中だ。確かに文弥だとて他の高校生に比べて小柄と言う訳ではないが、かといって取り立てて

大きい訳でも、身体を鍛えている訳でも無い。

そこらのチーマーに集団で難癖つけられれば、ひとたまりも無いだろう。ましてや、このあたりは繁華街に近いのだ。

「あ、っと……、バイト」

文弥が気まずそうに頭を掻く。これは内緒のつもりだったなと中りをつける。

「バイト？ いつからだい？ 俺には内緒で？」

「言う暇なかったじゃん。一実、ぜんぜん家にいないじゃねえか」すねた口調で指摘されて、逆に一実は言葉に詰まった。

「それに、目的があるんだ。3丁目のコンビニで4時間だけだし、あと一週間で終わるから」

まっすぐに見つめてくる文弥の視線に、嘘は無い。

自分で決めたことは必ずやり通せと云うのが、この家の教育方針だ。ソレを頑なにまもっているらしい文弥に文句等付けられるはずも無い。

「仕方がないな。ホントにそれで終わるんだね？」

大げさにため息を吐いてみせた一実に、文弥は飛びついて喜んだ。

「サンキュ！ 一実、大好きだ！」

「ちょ、ちよつと待て、文弥！」

文弥の熱烈な感謝の抱擁を、一実は焦って引き剥がす。

「一実？」

「止めないか。もう大人なんだから。重いぞ」

思わず勘違いしそうになる自分を押し留めて、一実は目線を逸らした。

小さな頃は文弥の信頼の証だった『大好き』も、大人の身体になった文弥では苦しいばかりの行為だ。

「もう、遅いからね。寝よう。明日に差し支える」

につこりと笑った顔は、既に冷静な大人の表情を取り繕えた筈だ。怪訝な表情の文弥が寂しげにうなずいた。

一実と文弥が初めて会ったのは、6年前の初夏。

文弥の両親の葬儀の席でのことだ。

交通事故——夜の街で酔った大学生を避けようとした文弥の父

親の車は、雨でスリップしてガードレールへ突っ込んだ。

激しい夕立が、視界を悪くし、渋滞を引き起こした。救急車が到着した時点で、すでに文弥の父親は死亡し、助手席の母親は搬送先の病院で息を引き取った。

あまりにもありふれた、だが、突然の死——

気丈に前を向いて、涙も見せない文弥を、付き合いの無い親戚たちが『可愛げが無い』と揶揄する。

だが、一実には文弥の瞳を見たときに判った。

信じたくないのだ、と。泣いたら、両親の死を認めなければならぬのだ、と。

必死でそれにすぐる文弥を見た瞬間——思わず、一実は手を伸ばしていた。

「一緒に、暮らそうか？」と。

その手にすがりつくように泣きじゃくった文弥の涙の暖かさを今も覚えている。

あのと看から、一実にとって文弥は守るべき存在になった。

それがいつからだろう。こんなに愛しいものになったのは。

義兄弟「ジブシーカード」＜3＞完

「一実。今度の日曜。空いてるか？」

出勤寸前に、文弥に捕まった。もう少しで顔を合わせずに済む筈だったのに。

「判らないな。何かあるのかい？」

「いや、出来ればちよつと付き合つて欲しいところがあつただけど……無理はしなくてもいいぜ」

一実は時間を気にするフリで何度も腕時計に視線を走らせる。

「判つたよ。なるべく空けるようにする。じゃ、いつてきます」

「いつてらっしゃい」

朝からさわやかな笑顔で見送ってくれる文弥に、一実は自然と頬が緩むのを抑えきれない。

「何か新婚さんみたいな会話だな」

ひとりぽつりと呟いた。

「一実」

赤くなつた頬を意識した瞬間に、横合いからした声に、思わず飛び上がりそうになる。

見ると、文弥が玄関脇のキッチンの窓から顔を覗かせていた。

「今日も遅くなるんだろ？ 本当に無理しなくてもいいんだからな」

「わ、解つてるよ」

カバンを抱え込んだまま、引きつった笑みを浮かべる一実を、文弥は、別の意味で驚かせてしまったと勘違いしたらしい。

「ご、ごめんな」

「い、や。気にしないで……、いつてきます」

一実は未だどきどきと跳ね上がる心臓を抱えるように、急いでいるフリでアパートの階段を駆け下りた。

「まったく。朝から動悸が治まらない——」

文弥の笑顔に、いつから違う意味でときどきするようになったのか。
「わざと顔合わせないようにするのも限界だな」

昨日はうまく梁川が声を掛けてくれたが、いつも助けが入るとは限らない。このまま、顔を合わせない事態が続けば、偶然ではなく今度は一実の会社の帰宅を待っていることだろう。

感情のまま爆発すれば、お互いにしこりを残す破目になるのは目に見えている。自分にやましい気持ちがあるから、尚更だ。

せめて文弥が高校を出る頃まで位は、保護者の役割でいられると思っていた。

いや、今だって望んでいるのだ。このまま、ずっとそばにいたい。文弥に対する罪滅ぼしのつもりで育て上げた筈だったのに、それは自分の中の別のものも育て上げてしまった。決して花開かせてはならない想いを。

「文弥」

失うことはどれだけの後悔と引き換えだろうか？

気付くと、駅の構内を歩いている。無意識にでも身体はいつも通り出社の為の道を辿っていることに、一実は可笑しくなった。

笑いが込み上げてきて止まらない。自分でもちよっとおかしいと思った瞬間に、目の前がブラックアウトした。

「遊佐！」

ふら付いた身体を、誰かの腕が支える。

「やな…がわ？」

「しゃべるな。えらく危なっかしい足取りで歩いてる奴がいると思ったら、お前かよ」

ここいらでは一番大きな乗換え駅だ。構内で知り合いに会っても不思議では無い。人の流れに逆らって、梁川は何とか一実を階段下のベンチへと座らせた。

「大丈夫だ。寝不足から来るただの貧血だよ」

一実は例外と冷静に自分自身を判断している。笑いが止まらなかったのも、いわゆるナチュラルハイと云う奴だ。

「解っててやってんのか？ 馬鹿だろう、お前。大体、このふた月ばかり、ずっと残業だろうが。その上、早朝出勤か？ 休日だって出社してんだろう！」

だが、梁川は納得しなかったらしい。激しい調子で詰め寄ってくる。「生憎とお前みたいに優秀じゃないんでな。数で勝負するしか無いんだ」

それをしれっと流しはしたものの、軽口にもいつもの精彩は感じられない。

「とにかく、気を付けろよ。身体は一つしか無いんだからな」

「充分承知はしてるさ」

無理に身体を起こそうとするのは止めて、ベンチにもたれかかる。

そのまま、腕時計のアラームをセットして、腕を組んだ。

「少し休んでいく。まだ幸い、時間はあるしな」

早く行けとばかりに梁川に手を振って、勝手にさっさと夢の中への逃避を試みる一実に、明らかにむっとした調子で、梁川は立ちあがった。

「野良犬か、俺は」

捨て台詞を投げ掛けて、梁川が足音も荒く歩み去るのを、既に一実は認識もしていなかった。

ピッ、ピッ、ピッ――

かすかな筈のアラーム音は、えらく耳障りな音に感じる。

重いまぶたを開いた一実の目の前には、会いたくて会いたくない相

手がいた。

「一実」

一瞬、夢でもみているのかと、一実は自分の記憶を探る。

「一実？ 大丈夫か？ 気分でも悪いのかよ」

突然の事態に、返事も出来ないでいる一実を、文弥が軽く揺さぶった。

途端に我に返った一実は、身を引くようにベンチから立ち上がる。

「文弥、何で……」

「学校行く途中に決まってんじゃないか」

確かに云われてみれば、文弥は黒の詰襟姿だ。

「一実。具合悪いんじゃないのか？ こんなところで寝るくらいなら何で家で寝ないんだよ」

文弥に問われて、慌てて一実は時計を見る。

「不味い、もう行かなきゃ。起こしてくれてありがとう。ごめん、帰ったらゆっくり話を聞くよ」

これ以上平静でいられる自信は無い。一実はひったくるようにビジネスバッグを取ると、階段を駆け上がった。

「一実ッ」

逃げ出すように走り出した一実の後ろから、文弥の声が追いかけてくる。

閉まりかけた通勤快速に、無理やり身体を滑り込ませて、ようやく一実は一息つくことが出来た。

「まいった」

覗き込んできた瞳に、心配そうな色が浮かんでいた。まっすぐに見つめる瞳を見返したのはいつたい幾日ぶりだろう。

一瞬、動けなかったのは、気分が悪い所為でも、寝不足の所為でも無い。ただ、文弥に見とれていたからだ。

「こんなにトチ狂ってるなんて……」

呟いた一実の声は深い後悔を滲ませていた。

「ただいま」

真っ暗なダイニング。

文弥はバイトでまだ帰っていないのだろう。それを狙ってこの時間に帰って来たのは正解だったらしい。もっとも、今日の今日では、残業することはさすがにやばいと思ったし、梁川にも止められた。

「おかえり」

部屋へ向かおうとした背中に掛かった声に、一実はぎくりと身体を竦ませる。

「帰ったらゆっくり話をするんだろ？」

文弥の口調は怒りと、悲しさが交ぜになったものだった。もう、ごまかしはきかないのだろう。

覚悟を決めて振り返ると、大人びた顔の文弥がそこにいた。

「そんな困ったような顔しなくても解ってるよ。俺をごまかしただけだったんだろ？ でも、俺は知りたいんだ。一実が何考えてんのか。何で俺を避けてんのか」

いつからこんな大人の顔をするようになったんだろう。一実は、もう長いこと文弥の顔を正面から見ていなかった。

「文弥——」

「なあ、俺、知りたいんだ。一実のことが好き、だから……」

自室のドアを背にした形で、文弥は追い詰められていた。いつの間にか小さな文弥は身長も自分と変わらないくらいになっている。

真正面から見詰められて、もう逃げは許されなかった。

「文弥。俺も文弥が好きだよ。でも、それは文弥とは違う意味だ。俺はそういう意味で文弥を好きになってはいけないんだよ」

「どうして？ 男同士だからか？ 俺はちゃんと一実が好きなんだ」

文弥からの告白は思いも掛けないものだった。

だが、そうであればあるだけ、文弥の想いに応えることは出来ない。

「駄目だ。文弥、間違ってる。こんなのは」

「何で？ 俺が一実のことが好きで、一実だって俺のことが好きなんだろ？ 間違ってるなんか――」

「間違ってるんだッ！」

文弥の反論を、一実は最後まで聞けなかった。

とうとう、その時が来たのだ。自分の罪を告白する時が。

「よく、聞くんた。文弥。俺は文弥の両親を……」

これで終わりだ。文弥は一生、一実を許さないだろう。

「知ってるぜ」

だが、あっさりと文弥は言い放った。

「親父とお袋が事故ったとき、避けた酔っ払いの大学生って『一実』のことなんだろ。お節介な親戚が教えてくれた」

「知っていて、何故？」

呆然とする一実に、文弥は泣き笑いの表情で必死に笑いかけた。

「そんなの、一実が悪いのかよ。運が悪かったんだ、そうだろう？」

それに聞かされたって一実を嫌いになんかなれなかった。葬式の日、手を伸ばしてくれたの、一実だけだったじゃないか。あのときに、一実のことが好きになったんだ」

一実ハンマーで頭を殴られた気分だった。

何を回り道していたのだろう。答は最初から文弥の瞳の中にあっただけなのに。

「一実、俺のこと、好きだよな？」

一実の瞳を窺うように、文弥が尋ねる。背は伸びても、大人になっても、中身は可愛い文弥のまんまだ。

もう我慢しなくてもいい。熱くなる身体に正直に、一実は文弥を抱き寄せた。

「一実？」

そのまま、唇を重ねあう。

ただたどしいながらも、文弥はちゃんと一実に応えていた。

「好きだ」

交し合う熱い夜はこれからだ。

文弥はふと、数日前のめくられることの無かった、『結果』のカードを思い出していた。

スピードのA――

運命と希望のうらはらを示したカード。あれはきっとそうだったのだ、と。

<おわり>

ヤンデレ攻め【逃がさない】

「やっと捕まえた」

怯えた表情のお前の視線は、呆然と空を見つめたままだ。

俺の名前すら呼ぼうとしないのに焦れて、さっさとベッドルームへと連れ込んだ。

何が何処にあるか、何処の誰とどういう付き合いがあるのかなんて、すでに調べはついている。

単純なお前の考えなど既にお見通しだ。

お前が俺の前から姿を消したとき、俺は考えた。

行方など簡単に突き止められる。幸い、親の遺産で食っている俺には、金も時間も充分にあつた。

だが、どうすれば逃がさずに済む？

お綺麗でお堅いお前が俺との関係に悩んでいることなど、とうに知っている。

このまま捕まえても、またお前は逃げ出すだけだ。

「い、やだ」

「そんな戯言は聞かない」

抵抗してくる身体を封じ込め、体重を掛けた。

嫌だと云うお前。そんな嘘を俺が見抜いていないと思ってるのか？

怖いのは、俺か。それとも俺から離れられなくなることか。

はじめて出会ったときから、俺はお前だけ見てきた。

追いかけて、捕まえて、俺のモノにしたとき、泣きながらしがみついていたお前。

それを諦められるとでも？

姿を消したお前を、俺はすぐには追わなかった。

まずは檻を作り上げてからだ。

お前の親友面したあのすかした野郎に、悩んでいるフリでお前との関係を告げる。

最初はびっくりしていた奴だが、俺が切々と訴えると、お前と話し合えと云って、実家の住所を漏らした。

次は実家に手を回す。

そこでは、親友の身を案じる誠実な男を演じた。

女たちは馬鹿だ。

俺の容姿に簡単に騙されてくれる。

誰にも云うなと云った、お前の願いを簡単に裏切って、俺へお前の居所を教えてくれた。

この部屋を突き止め、借りるフリをして、不動産屋へと出向く。ちよつと突っ込めば部屋の造りも簡単に判った。

三階の奥。窓も少なく、ベランダは無い。入り口は一箇所。

近くのスーパーでバイトをしていて、大学は休学中。

親しい友人は無く、家とスーパーを往復するだけの毎日。

口の軽い近所の連中や、スーパーの同僚は、ちよつと水を向けるだけで、ぺらぺらとしやべりだす。

俺は愛想を振りまきながら、情報を集め、外堀を埋めていく。

二度と逃がさない為の。

そして、周囲に張り巡らせた俺の檻の中へと、お前を閉じ込める。

お前が頼る先は、全て俺の手の内。

遠い花火の音が響く。

最後にお前と出掛けた思い出の夜の花。

「いや、だ。お願い」

すがりつくように俺を見る。嘔吐きめ。本当のお前の気持ちを聞かせてもらおう。

今日は、絶対に。

「駄目だ。逃がさない、もう二度と逃がすつもりはない」

お前は俺の一部だ。

切り離されては、お前も俺も生きてはいけない。
抱き締める軀は、やっとひとつになった安堵で震えている。

「俺のものだ」

可愛い小鳥、帰っておいで。俺の胸に。

二度と飛ばないように羽をもぎ取ってあげるから。

<おわり>

学園もの【桜色のアーチの下で】

家の近くにある桜並木。いつもはウキウキで、ステップでも踏みながら歩いているその道を、俺はずーんと落ち込んだ気分で歩いていた。

春色の桜のアーチ。

隣を歩くのは幼馴染の名波。ナナは小さくて可愛くて、でも元氣一杯で頑張り屋。

皆に慕われて、俺の自慢の幼馴染。

そのナナが恋をした。

可愛い女の子ならば、いつそ諦めが付いた。俺は女の子じゃないし、デカいし筋肉付いてるし、男前でもなければ可愛くもない。

俺もナナの隣に立てるくらいのカッコ良さや可愛さがあれば良かったのに。

そしたら、行動できたのに。

「あ、先輩！」

ナナが嬉しげな声を上げる。

その声に、恥ずかしそうにうつむき加減の顔を上げる男は、俺と同じくらいの長身で、白にブルーのラインのスタイリッシュな筈の詰襟は、むしろ男の野暮ったさを全面的に押し出していた。

同じ制服でも、ナナが着るのと男が着ているのは雲泥の差だ。

「良かった。先輩、ここで会えたのも何かの縁です。一緒に登校しましょう！」

にっこりと笑う天使の笑顔に逆らえる奴はいない。

もちろん、先輩と呼ばれた男も逆らえる筈はなく、ナナにまわりつかれるまま、学校への道を辿った。

今までナナと俺はずっとセットだった。ナナの隣にいるのは俺で、可愛いナナを妙な虫から護るために編成された親衛隊も、俺だけは

特別扱い。

「春海は僕が一番大事な親友だから」

そう連中にも紹介してくれた。

「春海を傷つける奴は容赦しないからね。覚悟して」

背の低いナナが皆を見上げて云うのに、俺は噴出しそうになるのを必死で堪える。ナナが容赦しないなんて凄んでも、ちっとも怖くない。

でも、そのナナの気持ち嬉しかった。

「せめて、可愛い女の子だったらなあ」

俺の口から何度目かのため息が漏れる。ナナの隣に今いるのは、朝あった野暮ったい先輩。今どきの高校生がいがり頭ってどうよ？ナナにサンドイッチを差し出されて、真っ赤になってうるたえている。

周囲の親衛隊も知らん振りだ。

「あゝあ、馬鹿じゃねーの」

「ホントにね」

後ろからした声に、びっくりして振り返る。そこに立っていたのは、ナナの親衛隊の一人だ。

「春海ちゃんは何がご不満なのかな？」

「ちゃん、止める」

俺みたいな大男がちゃん付けで呼ばれて嬉しい筈が無い。むしろ不気味だ。

「あんたこそ、いいのかよ？ ナナにあんな男で」

「名波が選んだんだ。俺たちにはどうしようもない」

自信たっぷり言い放つ男は、ナナの親衛隊の中でもとびきりの美男子だ。顔良し頭良し、ついでにスポーツ万能で、俺たちと同じ高校生とは思えない落ち着きっぷり。

オヤジ臭いとかっていうんじゃないぞ？ 大人の男みたいな感じってことだ。

「ナナが選んだなら、あんなでもいいって訳？」

「当然だろう。人の心は誰にも自由には出来ない。幸い、名波を利用しようとかは欠片も考えて無さそうな馬鹿だ。名波が飽きるまでならいい玩具だろ？」

さすがに力チンと来た。何だ？その言い草は。

「ナナはそんなことしない！ 本気なんだろ。応援してやろうって気は無いのか？」

「あんな男が名波に似合うとでも？ 君だって、そう考えてただろう？ 春海」

図星を指されて、俺がぐつと詰まった。

確かにナナの隣を取られて面白くなかったよ。それは認める。でも、ナナが選んだ人間を玩具扱いされるのは、さすがに嫌だ。

それに、ナナがいかにもあの恋愛慣れしてない先輩をもてあそんでいるような言い草も許せない。

「じゃあ、春海は応援するんだな？ 草間先輩と名波を」

「当たり前だ！ ナナが幸せになるなら、潔く振られてやらあ！」
振られるも何も、気づいてももらえなかったけどな。でも、純情そうな先輩（草間という名であるのを、俺は初めて知った）は、きつとナナ以外は目に入らなさそうだ。

先輩はナナが差し出す昼飯を、うつむき加減で食っている。でもうつむいている首筋まで真っ赤で、照れているのは丸わかりだ。俺にも一回くらいはしてほしかったけど、未練がましく眺めているのは止めだ！

ナナと先輩に背を向けて、俺は立ち上がった。

ナナと一緒にいたくて、何処にも入らなかったけど、何処か部活でも入ろう。

それでナナと決別するんだ。

男らしいがさつな動作で歩いていく春海は、何を考えているのか丸判りだ。

あの先輩といい、春海といい、どうしてこんなに愛らしいのだろう。同じ男子高校生としては問題がある気がする。

「久遠」

後ろから掛けられた声にギクリとして振り返った。

こぶしが俺の耳元すれすれを掠める。

「どうも姿が見えないと思ったら。春海に何の用だ？」

先輩の前で見せていた可愛い振りは何処へやら。目の前の名波は殺気さえ伴って俺を睨みつけている。

小柄で可愛い容姿に騙される人間が多すぎて、すっかりそれが板に付いているが、実は名波の性格は凶暴凶悪喧嘩っ早いときている。

親衛隊などといって、名波の周りを囲んでいる連中は、実は名波の逆の意味での護り役なのだ。

名波がやりすぎる前に止めに入るか、名波の前に手を出して、名波のやる気を削ぐか。そうでなければ、名波はとづくに犯罪者だ。

「いやだな。名波の味方だぜ。俺は。春海ちゃんが名波と彼のことを認めてくれるように、ちょっと助言しただけさ」

実際、あの単細胞なら操るのは簡単。春海のアートさが可愛い。余計なことを」

「何時までもお前がぶってるからだ。春海はすっかり可憐で可愛いと思い込んでる。実際は、草間先輩の方が狼に目を付けられたひつじちゃんだったのに」

「春海？」

何時の間に呼び捨てするようになったと、睨まれた。

「ちゃん付けは止めろってさ」

「遊びは許さないからね？」

「春海相手にそんなことはしない。本気さ。ただ、可愛いからね」俺が迫ったら、どんなにうろたえるだろう？ 騙すのは簡単だ。春

海を丸め込むくらいは朝飯前。

でも、そんなことはしちやいけない。

「春海を騙したら、殺すぜ？」

「もちろん」

仁王立ちの名波に云われるまでも無い。やっと見つけた俺の可愛い相手。

存分にお相手するよ。俺の全てを掛けて君をいとおしむ。

桜のアーチの下で名波を見つめて幸せそうに、はかなそうに笑った春海。

今度こそ終わりのある恋なんかさせないよ。

俺のそばですっと笑っていて。

<おわり>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3685m/>

マニアセレクト

2011年12月17日13時53分発行